『お島、お島、お前に催眠術をかけてやらう。催眠術をかけると、朝起が出來て
お寢小をしないやうになるよ。』
と乃公がいつた。
『まあ坊ちやん！　私は何時お寢小をして？　御自分こそ此間お母さんにお蒲團
を背負はされる所だつたぢやありませんか？』
とお島は勃氣になつて聞捨てならぬといふ顏付をした。どうも人聞の惡い事をい
ふ奴で困つて了ふ。
『お寢小は冗談だよ。けれとも朝起の方は眞正だ。蟲齒でも頭痛でも何でも直つ
て了ふ。僕は森川さんから掛け方を習つて來たんだから一つ掛けさせて御覽。』
『駄目ですよ。森川さんが仰有つてましたよ、彼は相手を信用しなくちや掛らな
いつて。坊ちやんはお島に信用がないから掛りません。』
『掛るつて。僕の言ふ通りにして注意を集注すれば直ぐに掛るよ。物は試しだか

ら、まあ此處へ坐つて御覽。』
とイヨ〳〵お島に催眠術を掛ける事となつた。乃公はお島を腰掛の上に待たして
置いて、茶碗二個を用意して來た。兩方共水が入つてゐる。一個の方は絲尻に墨
が塗つてある。其墨が塗つてある方をお島に渡して、
『おい、斯ういふ工合に持つんだよ。』
と乃公ち乃公の茶碗を持つた。
『何でも僕を信用して――此間五錢借りて返さない事なんか忘れて了つて！　僕の
爲る通りに眞似をしなくちや駄目だよ。分つたかい？　僕のする通りにするん
だよ。』
お島は本氣になつて乃公の顏を見詰めてゐる。これから一擧一動悉く乃公の眞
似をする料簡らしい。
『先づ斯ういふ風にして人差指を水の中へ入れて御覽。』

と乃公は自分の茶碗の中へ指を入れて見せた。お島は其通りにした。
『今度は斯ういふ工合に、人差指で茶碗の底を撫でるんだよ。』
お島は濡れた指尖で神妙に茶碗の底の墨を撫でた。指の先に墨がついた。
『それから斯ういふ風に、人差指で鼻の頭を擦つて御覽。』
お島は乃公の言ふ通りをした。鼻の頭に墨がついた。乃公は尙ほ幾度も水をつけさせて兩方の頰べたを擦らせた。腮を擦らせた。顏中が墨だらけになつてしつた。
しかしお島は、
『御覽なさい、些ッとも掛らないぢやありませんか。』
と威張つてゐる。剛情な奴だ。
『其れぐらゐ掛れば最早澤山だよ。室へ行つて鏡を……』
と乃公が言ひかけた時に、玄關の呼鈴がチリン〳〵鳴つた。
『お客樣だよ、早く行つて御覽。』

けれどもお島は頭を撫でて見たり、衣紋を繕つて見たりして、飼放しの鶴のやうに、立ちさうでナカ〳〵立たない。何か惡戲をされたと氣がついたのだらう。
又呼鈴が鳴つた。
『おい、早く行つておやりよ。頭なんか何うもなつてやしないよ。そら、又鳴つてゐる。』
お島は急き立てられて到頭出て行つたが、お客樣は嘸驚いたらう。若し新聞記者がお庭拜見にでも來たのなら、好い材料にされて了ふ。どうも粗々つかしい女だ。
後でお島は最早坊ちやんには愛想も懸想も盡きて了つたといつた。今迄は蔭になり日向になつて坊ちやんを庇つて上げたのだけれど、最早これからは什麼お仕置をされてもお詫をして上げない、又然ういふ時に內證でビスケットなんか持つて行つて上げませんから其積りでゐて下さいといつた。言つけたと見えて、お母さんからは應分のお小言があつた上に尙ほお父さんにも申上げるから其積りでお

いでといふ御沙汰があつた。で、乃公は色んな積りでゐなけりやならない。お歌姉さん丈はケラ〳〵笑つてゐた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今日はサンフランへ頭髪を刈りに行つた序でに少時遊んで來た。言ふ迄もなくサンフランといふのは床屋の事だ。親方は若い時分洋行したとかで、無暗とサンフランシスコを振りまはし、口言目には彼地では彼地ではといふものだから、到頭サンフランといふ綽名がついて了つた。一層の事サンフラン床とかサンフラン軒とかいふ看板を出して置けばいゝんだ。

乃公は最初は彼の親方を餘つ程豪い人だと思つてゐた。事によると以前は海軍の士官か何かだらうと思つてゐた。だつて閉塞隊で廣瀬中佐が戰死した時に、親方は號外を手に持つたまゝ、

『おいお直、廣瀬が死んだとよ。廣瀬が。惜い奴を殺して了つた。』

とお上さんを捉へて、宛然友達か何ぞが戰死したやうに談話をしてゐるから乃公は喫驚して、それぢや小父さんは廣瀬中佐を見た事があるのかいと訊いたら、先生悵然として、

『見た事があるの段ぢやない。廣瀬とは一緒に洋行したんだ。かうつと、最早彼れ此れ足掛け六年、否、尻上り七年になるか。して見ると月日の立つのは早いもんだ。一緒にサンフランシスコを散歩したのは宛然昨日のやうな心持がする。』

と答へて、どうも廣瀬は可愛さうな事をしたといつて、未だ頻りに氣の毒がつてゐた。乃公は念の爲めに職人に訊いて見たら、矢つ張り眞實だといつた。親方は以前は軍艦の理髪師だつたから、多分親方の乘つてゐた船に廣瀬中佐も乘つてゐて、親方がサンフランシスコへ上陸した時に廣瀬中佐もサンフランシスコへ上陸

し、尙ほ親方がサンフランシスコを散歩した時に廣瀨中佐もサンフランシスコを散歩したのだらうとの事だつた。成程然う聞いて見ると矢張り一緒に洋行して一緒に散歩した譯になる。物は話しやうと聞きやうだと思つた。

其れは然うとして、今日は親方は出仕事で留守だつた。平常親方がゐると、剃刀に觸る事も盆栽を弄る事も出來ない。乃公は散髪が濟んでから、三十分ばかり遊んでゐたが、何にも惡戯なんかしやしない。唯一度一寸乃公の手が職人の肱に觸つたものだから、剃刀が辷つたと見えて、お客さんの眉毛が半分ばかり落ちて了つた。どうも久吉は粗々つかしくて困る。それに相手が惡かつた。仕事師だから事が荒い。いくら謝つても勘忍ならねえといつて可愛さうに到頭久吉の眉毛を納得づくで兩方共剃り落して、お金は拂はずに行つて了つた。どうも非道い奴があればあるものだ。久吉は女形のやうな顔をして怨めしさうに乃公の顔を見てゐた。

乃公はどうも氣の毒で〳〵穴があつたら消えも入りたいやうな心持だつた。もう邪魔にならないやうに隅ッ子の方で遊んで下さいとお上さんに斷わられたから、乃公は座敷へ上つて大人なしく五十三驛の繪を見てゐる中に、親方の大切にしてゐる鶯が逃げ出した。籠馴れてゐるから籠を持つて行けば入るのに、職人達が乃公の言ふ事を聽かないで無暗に追つたものだから、惜しい事に谷の音は到頭戸外へ逃げて了つた。乃公は此上又どんな事が出來するかも分らないと思ひ、かたゞ〳〵お上さんの注意があつたから、もう一人鳥居つむじのお客が來る迄は遊むでゐる積りだつたけれど、諦めて歸つて來て了つた。どうも易者は信用が出來ない。お前さんは是から床屋へ行くといつたね。若し床屋で鳥居つむじの人に二人會ふやうならお前さんの願望は叩ふんだなんて、無代だと思つて茶羅鉾を言やがる。

＊　＊　＊　＊

＊　＊　＊　＊

乃公は此頃は大人なしくなつて、時々お父さんと一緒に教會へ行く。もう持つて行きたくても、ピストルやオルゴールは破れて了つたから安心なものだ。お父さんは、

『太郎は此頃急に教會が好きになつたね。』

と感心した。乃公は唯、

『少し感ずる所がありますから。』

と脱會でもする時のやうな口上をいつて置いた。お島も是には感心して、坊ちやんは何うなすつたの？　急に御信心になつてねと此頃は稍氣をゆるしてゐる。實は全く感ずる所があるんだ。追々とクリスマスが近づくので、日曜學校へ出て置かないと、種々都合の惡い事がある。去年サンタ・クラウスを取逃がしてゐるから、今年は未だ少々早蒔だけれど、警戒をさ〳〵怠りなしといふ所だ。

けれども牧師の説教の相變らず長いのには弱つて了ふ。皆は彼は水飴説教だといつてゐる。それに彼奴は餘つ程負け惜みの強い奴だ。何にでも其れ相應に理窟をつけるから生意氣だ。天氣の好い日には、此うらゝかなる日曜日の朝に於きまして我々一同聖堂に集ひ得ましたる事を感謝致しますといつて祈禱する。是は當然の話で、別段苦情もないが、雨の降る日には、

『我々一同此雨の日にも拘らず聖堂に集ひまして、あなたの御名を讃美する事の出來まするのを感謝致しまする。』

と、るの字づくめに祈る。ところが此間は朝つから雨が降つて風が吹いて雷が鳴つて、來會者は五六人しかなかつた。斯ういふ時には奴さん何といつて祈禱するかと、乃公は耳を澄まして聞いてゐたら、

『天と地とを造り之を司り給ふ神よ、あなたは大雨を降らせ、大風を吹かせ、且つ迅雷を轟かして、自然の力の如何に雄大なるかを我等に教へ給ふが故に有難

く感謝致しまする。』

といつた。何處まで負け惜みが強いんだか分らない。

尙ほ先日日曜學校の時に、先生、神樣はすべての物をお造りになつたと申しますが、何ういふ譯で蚤だの虱だの南京蟲だのといふ厄介なものをお造りになつたのでせうか、と乃公が質問してやつたら、其れは不潔にすると然ういふ惡蟲が發生するから、不潔にしないやうにといふ戒の爲めにお造りになつたのですと答へた。そんなら何故蛇なんていふ厭なものをお造りになつたのでせうか、エバは欺されて了つたぢやありませんか、と又訊いて見たら、其れは蛇等のゐるやうな危い所へ行くなといふ戒の爲めにお造りになつたのですと答へた。是ぢや何處まで行つても同じ事だ。何を訊いたつて皆戒の爲めなんだから、最早訊く事は中止にしたが、乃公なんか、一體何ういふ戒の爲めに造られたのだらう？　まさか那麼危い子の傍へ寄りつかないやうにといふ戒の爲めに造られたのではなからう。

若し太郎さんのやうに大人なしくしてゐると、今年のクリスマスにはサンタ・クラウスの贈物を彼の袋ごと貰へるから、子供は皆彼の子の眞似をしろといふ戒の爲めに造られたのなら實に有望だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『唯今。』

といつて、乃公は威勢よく鞄を投り出した。

『唯今ぢやありませんよ。』

とお母さんが目を光らせた。乃公は實際唯今の積りなんだが、それとも學校から又小使の髯おかめでも訊きに來たのか知れないから、此處は控り目を利く所ぢやないと思つて、沈默を守つてゐた。すると何だ、學校の事ぢやない。今日サンフランの親方が仕事に來たので、鶯の事が霧纐して了つたのだ。お父さんは餘り氣

の毒だからといつて、親方の欲しがつてゐた盆栽を一鉢やつたのださうだ。どうも彼の親方はおしやべりで困る。

『けれどもお母さん、僕は今日お清書と算術が甲でしたよ。』

『さうかい？　今日のお清書つて、お前今日學校へ行つたのかい？』

『行きましたつて。今度からは未だ一度も休んだ事なんかありません。』

『でもお前今日は大祭日だよ。』

乃公はしまつたと思つた。實は昨日も一昨日も休んだものだから、今日が大祭日といふ事には少しも氣がつかなかつた。其れなら朝から公然と遊ぶのだつたに、御苦勞千萬な鞄なんか擔ぎ出して忌々しい事をした。

『御覽なさい。嘘ばかり吐いて。』

とお母さんが笑ひながら睨めた。お島はクス〳〵笑つてゐた。仕樣のない奴だ。

＊　＊　＊　＊　＊

井上さんが又毎晩のやうにお歌姉さんの許へ遊びに來始めた。一時遠除いたから、好い鹽梅だと思つてゐたら、銀行の人が肺病の氣味とかで破談になつたと聞いて又來始めたのだらう。しかし肺病と義眼ぢや五十歩百歩だ。前者は傳染が恐ろしいけれど、後者だつて隨分氣味が惡いや。最も寢ても目を開いてゐるといふから盜賊の用心にはなる。其盜賊の用心は今日は夕方から來てゐる。さうして明日は午後から二人で馬車に乘つて郊外散策に出掛けませうなんて言つてやがつた。單に言つてゐたといつて然る可き所を、言つてゐやがつたとしたのには聊か理由がある。二人で郊外散策に出掛けませうとは乃公だつて別條異存のあらう筈もないのだが、其後へ何とか最些と艶を附けて貰ひたかつた。現君乃公が其席に刻してゐるのだから、少くとも、

『おい、大將、君も如何だね。餘り家に燻つて勉強ばかりしてゐると肺病が出るぜ。』

ぐらゐの事はお世辭にも言ふだらうと思つて、多少あてにしてゐたのに、果さざるかな、那麼事はアルコール漬にしたくも言やがらないからである。

乃公は行くと決心した。乃公は何でも直に決心して了ふ。馬車の腰掛の下に匿れてゐて二人の談話を立聞、立聞きぢやない坐り聞きか、屈み聞きしてやらう、忠公も連れて行つてやりたいのだけれど、狹いから二人なんて入れまい。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

三時頃に井上さんは新しい一頭立の馬車で玄關へ乘りつけた。馬は黑馬で、馬具には金色の裝飾が附いてゐる。何處で借りて來たか立派なものだ。乃公は晝頃から家の周圍を雨鷺ついて見張番をしてゐた。さうして野郎の洋服姿が馬車の到着を知らせる爲めに、玄關に隱れると入れ違ひに、乃公は馬車へ辷り込んで席の下へ匿れて了つた。

乃公は窮屈で困つた、二人の乘る間出來る丈身體を小くして、鼠のやうに靜かにしてゐた。やがて井上さんが手綱を取つて、乃公達はガラ〳〵と動き出した。馬は威勢よく跳ねて、乃公達は町を外れてから七八哩も走つた。乃公は狹い所に蝦のやうになつた儘草臥れて了つた、這麼思ひをする位なら一層來なければよかつたと今更後悔し始めた。身體中が痛い。其中に追々うそろ寒くなり、日が入つてからは馬の足がめつきり遲くなつた。乃公の心も知らないで、トコ〳〵歩いてゐる。

『歌子さん、歌子さん、ねえ、歌子さん。』

と井上さんは歌子姉さんを赤ん坊でも愛すやうに言ふ。

姉さんは返辭をしない、好い氣味だ。

『歌子さん、ねえ、歌子さん。あなたは慍つてゐなさるのでせう？』

と井上さんは何か慣られる事でもあるやうにいふ。或は這麼年頃の娘を赤ん坊扱

ひにして濟まなかつたと思つたのかも知れい。
『何にも慍つてなんかゐやしませんけれど、私、少し考へた事があるわ。』
と今度は姉さんの聲だ。
『何ですかお聞かせ下さい。』
『私、失戀した人は厭です。』
『失戀したつて？　私がですか？　那麼事を仰有つちや困る。あなたが今迄の婦人の友達の事を話せと御注文なすつたから、一と通りお話申上げたばかりで、決して失戀ぢやないのです。然う御解釋なすつちや私は眞正に困る。』
と井上さんは百方辯解を始めた。さうして歌子さんは自分の愛情を寄せる最初の婦人で、自分の愛情を寄せる婦人は天にも地にも歌子さん一人である。あゝ我が心の主よ、天の使よ、柔和なる鳩よ、等と直譯的の事を長々と喋つた。
それから一二分の間は、二人共默つてゐた。すると何處かでコト〳〵と音がし

た。車の音かも知れない。公乃の音かも知れない。兎に角乃公は足が大根のやうに痺れて、肱が痛くて堪らない。それに寒くて腹が空つて、井上さんの眼の右左か同じでない事なんか考へる餘地もなかつた。
『あら厭だ！　私、怖い！　何かゐますよ。此下に。犬でせうか？』
『大丈夫ですよ、大丈夫だ。私が附いてゐる。生命を棄てゝも私はあなたを保護……あいた、あいた、おいち、おいち！』
『厭ですよ、私、馬を止めて下さい！　私下りますから。』
『一體何がゐるのだらう？』
と井上さんは舍せば好いのに席の下を探つた。手が丁度乃公の頭の所へ來たから乃公は犬だと思はせる積りで、思ひ樣咬付いてやつた。
『おいちゝ！　犬だ！　狂犬だ！　食ひついた！　大變だ！　恐水病になる！』
と井上さんは直樣姉さんを置放しにして馬車から飛下りた。生命を棄てゝも姉さ

んを保護する人だから驚いちまふ！

乃公は最早好い時分だと思つた。最早井上なんか馬車へ入らせない、姉さんと二人で歸るんだ、と決心すると、ポッケットから花火の束と燐寸を取出して、火を點けるより早く馬の尻つぺたへ打付けた。ボン／＼、パン／＼、パチ／＼。

歌子姉さんは悲鳴を揚げた。井上さんは田圃道に尻持を搗いて唸つた。馬は喧しい物音に抑天して、乃公と姉さんを乗せた儘一目散に走り出した。乃公は手綱を取らうとしたけれど、井上さんが放した時の儘馬の腹の方へ吊下つてゐるから何うには手が屆かない。其に最早日は全然暮れて眞暗だ。

ガラ／＼／＼と乃公達は何哩も走つた。可愛さうに井上さんは田圃の眞中へ取殘されて了つた。姉さんは馬が高飛をする度毎に悲鳴聲を立てる。乃公は何うする事も出來ず、今にも馬車が顚覆つて粉微塵になるかと、實際生きた心持はなかつた。

其中に乃公達は町へ差し掛つて明るくなつた。往來の人達は走り寄つて馬を止めやうとしたが、馬は眞一文字は某馬車會社の立派な厩舎へと驅付けた。どうも物覺えのいゝ奴だ。其處の人達は乃公達を下して呉れた。

『姉さん、何故那麼に泣くの？　最早大丈夫だよ。』

『まあ、お前は、太郎さんかい！　私は又狂犬が先刻から私を咬まうとしてゐるのかと思つた。眞正にまあ仕樣のない子だねえ！　家へ歸つてからお父さんにお仕置をして戴くから其積りでおいでよ。もし／＼、馬車屋さん、これから直ぐに馬車を一臺仕立てゝ、晝間此馬車をお借りになつお方を迎ひに行つて下さいませんか、井上さんと申します、然うですねえ、田圃の中にゐます——五六哩ばかり向ふの。まあ怪我がなくて宜かつた。眞正にお前は仕樣のない子だねえ。』

『僕は何にも惡い事をする積りぢやなかつたのですよ。唯井上さんが什麼お話を

なさるかと思つて席の下へ匿れてゐたんですよ。僕ならば天の使だなんといつて置いて、女の子を狂犬と一緒に置去りになんかしやしない。井上さんは屹度恐水病になりますよ。もうなつてるかも知れない。痙攣をふるふと今一つの眼が又飛出て了ふでせうよ。けれども姉さん、失戀つて……。』

けれども姉さんに乃公の口へ手を當てゝ了つたから、乃公は言はうと思つた事も言はずに了つた。それに馬丁達は乃公を睨みつけやがつた。姉さんが頻りに押すから乃公は仕方なく歩き出した。

家へ歸つたら皆は集つてお茶を飲むでゐた。何も彼も甘さうに見えた。喉から手が出さうだつたけれど、乃公は實際其れどころぢやない。きつと非道い目に會ふ。姉さんがお母さんに言つけてゐる間に、乃公はこつそりと二階へ上つて了つた。

九時頃にお島が晩飯を運んで來た。お島の談話に依ると、井上さんは今しがた

埃だらけになつて歸つて來たさうだ。例の目玉は飛出やしなかつたかと訊いたら飛び出てはゐなかつたといふ。尤も馬車から飛下りる時、どうとかして、右の足だか左の足だかを挫いたさうだ。眞正に然うなら義眼の上に義足をして、廢兵院の會計にでもなつたら宜からう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今日忠公の家の庭で遊んでゐたら、忠公が泥だらけの銅貨見たいなものを拾ひ上げた。見ると日外ポチが――ポチは可愛さうな事をして了つた――失した大阪の伯父さんの目鏡の玉だ。占めたと思つて――全く此眼鏡のお蔭で乃公は二萬圓といふ遺産を棒に振つてゐるから――二人がゝりで初茸探しに探して見たら、もう一個の方も草の中から出て來た。

乃公は眼鏡玉を磨いて、火事でも始つたやうに伯父さんの室へ駈付けた。伯父

さん、伯父さん、伯父さんの目玉を見付けて來ましたよといつて、例の金縁の枠へ玉を篏め更へた。さあ掛けて御覽なさいと言つて差出すと、奴さん例の通り鼻をクシン／＼言はせてゐたが、

『これは希代やな。これは希代やな。まあ豪ら能う見えるわ！』

と大喜びをした。さうして乃公に五十錢銀貨を呉れて、是で蓄音器でもお買ひと言つた。五十錢ぢや蓄音器は難しいといふと、でも蓄音器つて物は玩具だらうがなと、眼鏡越しに乃公を睨むだ。どうも論理に合はない。兎に角伯父さんは玩具なら五十錢以下と確信してゐるらしい。時勢後れも程度問題だ。伯父さん位になると一種掬す可き骨董的氣品を帶びて來る。

尙ほ伯父さんは正直な河童だといつて乃公を褒めて、此上大人なしくすれば遺言狀を書き更へて財産を讓つて呉れるといふ約束をした。そこで乃公も大に肝膽相照して、伯父さんは尊ぢやないけれど、お年齢の所爲で大分お耳がお遠くなつ

てゐなさる事や、毛頭藥罐ぢやないけれど、何分にもお頭が甲羅經て在らつしやるから、毛が擦り切れて居なさる事等話して御機嫌を取つた。伯父さんナカ〳〵面白いボンチだといつて喜んでゐた。それ見ろ、乃公だつて惡い事ばかりはしやしない。今夜はお祈りをして寢る。

『主よ、いたづら小僧である事より我を救ひ給へ。惡い事をする積りはなくて、不覺惡い事になつて了ふ運の惡い子を憐み給へ。大阪の伯父さんを惠み給へ。』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

此間又手品が掛つた。大分面白い藝當があるといふ評判だつたが、お父さんは手品ぢや最早懲り〳〵してゐるから連れて行つて呉れない。呉れないばかりでなく、那麼ものは麻疹と同樣で、直ぐに感染るから子供の近寄る可きものぢやないつ。太郎、お前は見物になんか行つちやならんぞ、と最早怒つてゐる。然るに忠

公は家へ田舍からお客が來てゐるので、其れと一緒に二度までも見物に行つてゐる。眞正に運の好い奴だ。一體隣家へは能く那麼お客が來る。家へ來るのは大阪の伯父さんでなければ、田舍の伯母さんで、全く悲觀せざるを得ない。尤も人間萬事得て然うしたものださうだ。其證據には乃公の林檎より姉さんの林檎の方が何時も大きく見える。此方のよりか摺れちがひ電車に必ず美人が餘計に乘つてゐる。

其れは然うとして置いて、其の田舍のお客の子の事で今日は大變な事になつて了つた。是といふのも忠公が皆惡いんだ。お客に來た子といふのは日外家へお客に來て乃公の空氣銃と望遠鏡を破約にして行つた菊ちやんのやうな可愛らしい子で、名は鈴さやんといふ。忠公は此頃は學校から歸つて來ると直ぐに此鈴ちんのお相手を仰付かるので、實に遣り切れないといつてゐる。今日は乃公が垣根の上から見てゐると、忠乃め、天理教宣敷といふ手付をして、『若し〳〵龜よ、龜さん

よ』を躍つてゐやがるから、乃公は早速手を拍いて、

『男と女と豆煎りい。煎つても煎つても煎れない。』

と冷かしてやつた。すると忠公は舌をペロリと出して手招きをした。手招きは無論來いといふ事で、舌を出すのはお父さんもお母さんも不在だといふ合圖だ。乃公は早速垣根から飛下りた。

『おい忠公、此柿は最早食へるかい？』

と乃公は柿を一つ拗切つた。

『未だ食へないんだけれど、お母さんがゐないから食べてもいゝ。』

と忠公は何時も這麼論理に合はない事を言ふ。餘つ程親不孝な奴だ。乃公の言出さない中に最早大分喰べたと見えて其處らに種が澤山ちらばつてゐた。子として親の言ふ事を聽かない位だから、友達としても頼もしくない。元來此柿は熟したら二人で食はうと約束して置いた柿で、單獨に勝手に食ふ可き柿ぢやない。

どうも鈴ちやんは世話の燒ける子だ。泣いてばかりゐて仕樣がない。雙六をしても私の番を五度ぬかしたから面白くないといつて泣く。一寸頭の上へ蛇の脫衣を載つけても泣く。西京を見せてやらうと頭を捉へて持ち上げても泣く。那麼に泣くと此井戸ん中へ投り込んで了ふぞといつても泣く。要するにゴム人形のやうに泣いてばかりゐるから、乃公は最後に本所の置いてきぼりをして遊ばうと發起した。忠公は無論贊成だ。

そこで乃公と忠公と物置から古い乳母車を引ずり出して鈴ちやんを押込んだ。鈴ちやんはお花見にでも連れて行つて貰ふ氣になつて、今度は泣かない。目かくしをされても、見えちぇよ〳〵、今電信柱の所を通つたでちよう等と一向平氣でゐる。子供は罪の無いものだ。乃公達は二人掛りで、ガラ〳〵ガラと車を押して町外れの氷川樣の森へ行つた。少時の間は森の中で彼岸花なんか探つてお相手をしてゐたが、其中に隙を見て、到頭鈴ちやんを置いて來ぼりにして了つた。

途中で雷樣が鳴り始めた。忠公は何うしやうかと言つたが、乃公は返辭をしなかつた。柿を喰べて水を飲んだ所爲か、腹が痛くて堪らない。乃公が催便の速力を以て家へ馳けつけた頃には細引のやうな太い雨が降り出した。忠公は又何うしやうかといつて泣きさうな顏になつた。乃公はお前の所爲で腹が痛くて仕樣がないと答へた。

忠公の家ではお母さんとお客さんが外から歸つて來て、鈴ちやんの姿が見えないといふので大騷動を始めた。一體忠公は少しも氣轉の利かない奴だから仕方がない。然ういふ時には『那麼に仰有るけれど、又何處かへ置所忘れをなすつたのぢやありませんか？　まあ這麼ところにといふやうな所から出て來る事が能くあるものですから』ぐらゐの事をいつて機先を制せば宜いのに、馬鹿正直に白狀したと見えて、飛んだ事になつて了つた。家からは料理人、隣りからは忠公と書生が御苦勞千萬にも此雨の中を提燈つけて氷川樣の森へ探しに行つた。鈴ちやんの

お母さんは彼の子は雷様が嫌ひだから（嫌ひだからつて、雷様の好きな奴があつて堪るものか）今頃は什麼に怯えてゐるだらうと雷様の鳴る度に狂亂のやうになつて泣いてゐるさうだ。お母さんは未だお隣家から歸らない。

乃公は自分の室へ錠を下して慄へてゐる。今にお叉さんがお仕置をしに來るに相違ない。乃公は洞穴の中のロバート・ブルースといふ格で凝つと呼吸を殺してゐる。嗚呼、どうか親切な蜘蛛が一疋出て來て、彼の入口に巣を掛けてくれないかなあ！　すれば敵は乃公が此處にゐないと思つて此儘通り過ぎて了ふだらう。乃公は此パン一個で幾日生命が續くか試して見る。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

大風の吹いた後のやうだといふ事がある。全く然うだと思ふ。三日前は萬事暗澹としてゐたが、今はすべてが光明である。和議は成つた。包圍は解けた。小き

太郎は再び大人を負かして了つた。皆は出て來ても眞正に何うもしないと約束したから、乃公は大威張りで——實は餓じくてへト〳〵になつて出て來た。で、乃公の室に置いてあつた道具は先づ〳〵助かつた。若し曠日彌久といふやうな事になつたら、乃公は片つぱしから毀してやる積りだつた。忠公は何うしたらうと思つて見に行つた。

『おい、藏へ入れられたかい？』

と訊いたら、忠公は情けない顔をして、

『未だ入れられないけれど今に入れられる。鈴ちやんのゐる間は面當がましくなるから、お母さんは何ともしないけれど、お客が歸り次第お仕置に會ふ豫約になつてゐるから困つちまふ。』

といつてゐた。厭な豫約をしたものだ。尙ほ鈴ちやんはどうしたかと訊いたら、未だ熱が退かないで困つてゐるが、實は僕は未だお葬式といふものへ行つた事が

ないから、何なら死んでも宜いと思つてゐると答へた。ところへ忠公のお母さんが窓から首を出して、

『忠一！』

と、乃公を食ひつきさうに睨めつけたから、乃公は急いで逃げて來た。

するとお丁度森川さんが來てゐて、今年は流行病がないから、からきし閑でとこほしてゐた。乃公の顔を見ると、太郎さんは此頃は大層大人しくなつたといふ評判だから、おみやげを持つて來たよといつて乃公に手風琴を呉れた。ナカ〳〵話せる男だ。乃公は素から森川さんは好きだ。風琴は福引で貰つたのださうだけれど上等だ。是さへあれば先づ〳〵食ふには事を缺かない。此上の事に猿が一疋あると、實に願つたり叶つたりで、家を逃げ出しても電車の車掌にならずに濟む。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

乃公の家に一椿事があつた。新聞屋の耳に入らないやうにと秘密にしてゐるくらゐの事件だ。何人が悪いかは今更此處に言ふ迄もない。乃公は實に恐ろしい子だ。犯した罪をこれから告白する。けれども乃公は斷つて置くが、那麼悪い事をする料簡は毛頭なかつたのだ。其れでも何でも乃公が悪いといふのだから仕方がない。一言すれば乃公は厄介な子だ。眞正に厄介の子だよ。悪い料簡なんか些つとも無いのに、唯自然と色々の悪い事が起つて來るのだもの。運の悪い子だ。

乃公は朝の中は眞正に善い子だつた。忠公のお母さんが厭に怖い目ばかりするものだから、乃公は意地にかゝつて到頭お昼迄忠公の家に遊んでゐてやつた。乃公は決して剛情ぢやないが、唯困難に打勝たうといふ意志が矢鱈と強いのだ。お晝からは忠公が家へ遊びに來た。其中にお母さんは姉さんと買物に出かけたから乃公達はお母さんのお室で遊んだ。乃公はテーブルの上へ椅子を置いて、其れへ登つて棚の一番上を探して見たら種々のお藥があつた。是は甘いから飲んで見ろ

と、忠公に青い奴を飲ませたら、忠公は青くなつて、何だかお腹の中へ頭痛が入つたやうな厭な心持がすると言ひ出した。するとお島は大急ぎで、熱い湯で芥子を溶いて忠公に飲ませた。どうも亂暴な事をする。忠公は間もなく先刻の青い藥を吐き出して、少々氣分が好くなつた。お島が芥子を取りに行つた間に、乃公はお父さんの毛皮外套を見たら、ポケットの中にピストルがあつた。忠公はレボルバーだといつた。で、乃公は内證でゐて呉れといつて、自分の枕の下へ置いて來た。

『おい忠公、心持が好くなつたら、今度は何か面白い事をして遊ばう。』

と乃公が言つたけれど、忠公は頭痛を吐き出してから、又可笑な心持になつたといつて、到頭歸つて行つて了つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

お島が見つけると困るから、乃公はピストルは矢張り枕の下へ匿して置いた。姉さんやお島を驚かしてやる積りだつた。玉が入つてゐなくても、入つてゐると思つて、キヤッ〳〵いふから面白いや。すべて女の子といふものはピストルや鐵砲を見せると、蟲の所爲だか何の所爲だか、狂人のやうになつて騒ぎ廻る。

曉になつて牧師さんが又お茶を飲みに來た。牧師といふものはお茶を飲みに來る事にかけてはチャムピオンだ。方々を廻つて奥樣方と一緒にお茶を飲んだり晩御飯を喰べたりするのが半商賣だから叶はない。乃公は凝つと耳を澄ました。お父さんは會があるといつて夕方から出て行つた。お母さんは忠公を見舞にお隣家へ行つてゐる筈だ。伯父さんなんかゐたつて、ゐなくたつて從頭眼中に置いてゐない。

『さて。』

と乃公は胸へ手を當てた。乃公は是から二階へ這上つて、彼のピストルを持つて

來て、客間へ入つて行つて、姉さんとお島と牧師の度膽を抜いてくれやう。玉は入つてゐないから大丈夫だ。皆手をついて謝るかも知れない。と乃公は直ぐに二階へ行つてピストルを持つて來た。

『お島、お島、お前一寸お前の青い毛布の肩掛を貸しておくれ。僕が土人の眞似をして見せるから。』

お島はピストルの事なんか夢にも知らないから、文句を言はずに肩掛を貸して呉れた。乃公は其れで身體を包んで、鐵砲の積りで杖を擔いで、そつと客間の樣子を窺つた。少し戸を開けたが、神ならぬ身の姉さんと牧師は土人が攻め寄せたのも知らないで、何か面白さうに談話をしてゐる。乃公は一二三と數へて十になつた時、恐ろしい聲を立てゝ客間へ突進した。

『まあ！』

と姉さんは乃公の風體を見て呆れてゐる。乃公は早速ピストルを突付けて、

『降參か、打つぞ！』

と驚かしてやつた。すると姉さんは本氣になつて、顏へ手を當てた儘、幾度も幾度も悲鳴聲を立てた。

『太郎さん、危い！』

といつて、牧師が乃公を止めやうとしたから、乃公は今度は牧師に筒先を向けて

『ペール・チーフ、降參しろ！　打つぞ！』

と又驚かしてやつた。するとお島が馳けつけて來て、

『坊ちやん、まあ危い！　お止し遊ばせ。玉が入つてますからお止し遊ばせ。』

と本藏のやうに乃公を抱き止めて了つた。乃公は今はこれまでなりと思つて、椅子の後ろに隱れた牧師を目蒐け、

『ペール・チーフ！』

といひさま、引金を引くと、喫驚する位大きな音がした。乃公はピストルを投り

出した。ペール・チーフは撞乎と尻餅を搗いた。

乃公は是以上書くに忍びない。乃公は實に惡い事をして了つた。しかし玉が入つてゐやうとは夢にも思はなかつたのだから、眞正の過失である。玉は美事頭に命中した。何とかといふ所を通過して今は何とかといふ所に止つてゐるさうだ。丁度探險隊のやうな玉だ。傷は重いけれど、一命にかゝはるやうな事はない。夜が明け次第森川さんが傷口から玉を拔き取るさうだから安心だ。牧師は別間に寢てゐる。何とも言はないさうだ。口が利けないばかりでなく、人事不省に陷づてゐるさうだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

朝もパンと水、晝もパンと水、晩もパンと水だつた。乃公は今から一箇月間此室から出られないんださうだ。若し牧師が死んでも、乃公をお葬式に行かせない

料簡らしい。眞正に玉が入つてゐないと思つてした過失だから、那麼に非道くしなくても宜からう。皆は乃公を惡魔か何ぞのやうに思つて、顏さへ見れば厭な顏をする。お島丈は感心な女だ。

『坊ちやん、淋しいでせうね。』

とお島が鍵の穴から言葉をかけて、最早森川さんが玉を拔取つて、經過が大層好い事、牧師さんはお晝からは椅子に坐つてゐる事、二三日の中にはお家へ歸れるだらう事等知らせ、尙ほ何とか工夫をして、ビスケットとワップルを入れて上げませうと約束してくれた。斯うなると約束丈でも有難い。

乃公は種々考へた。若しロビンソン・スクルーソーが乃公のやうに室の内へ閉ぢ込められたら何うするだらう？　彼はのんべんくらりんと戸の開くまで待つてゐるだらうか？　否、若し彼に鋏があるなら、彼は其れを用ゐて毛布を切り、之を繩に綯つて、窓から下りるに相違ない。

乃公は鋏がなかつたけれど、毛布は困難もなく裂けた。乃公は長い繩を拵へて一方を簞笥の引手に結びつけ、兩手で確乎と捉つて、火事の時人が逃げるやうにして窓から下りる積りだつた。

其れから後は何うなつたか更に記憶がない。といふのは頭を地面に打付けて——二階に居て頭が地面に打付かつたといふと、大層頸が長い勘定になるが、乃公は決して轆轤頸ぢやない——唯簞笥の引出が抜けたか、繩の結び目が解けたかして、乃公は地面へ頭を打付けたのだ。兎に角落ちたのぢやない。落ちたなんていへば喧嘩だ。さうして氣がついた時にはお父さんやお母さんや森川さんに取圍まれてゐた。

『どうも眞正に手のつけられない奴だ。』

とお父さんが言つた。

『私も斯うお家がお顧客になつちや困る。』

と森川さんが言つた。

乃公は何だか白いものがチロ〳〵すると思つたら、頭中繃帶をしてゐた。バンと水で懲役人扱ひをされるより病人になる方が餘つ程利益だと思つたから、乃公は別段苦情も言はなかつたが、何だか自分の頭だか他人の頭だか分らないやうな心持だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

牧師も全快し、續いて乃公も本腹したが、お蔭で二週間ばかり學校を休んだ。考へて見ると、乃公の怪我をしたのは窓から下りやうとしたのに起因してゐる。窓から下りやうとしたのは室へ閉ぢ込められたからだ。室へ閉ぢ込められた原因は牧師の怪我で、牧師の怪我はピストルだ。其ピストルの手に入つた機會は忠公が遊びに來たからである。して見ると此間からの災難は直接並に間接に忠公の

お蔭だ。一體ならば最早絶交して了ふのだけれど、故意とした事でないと思つて大目に見て遊んでやるのに、忠公のお母さんは眞正に分らず屋だ。

『忠一や、お前は命が惜しくないならお隣りの悪戯ッ子とお遊び。』

なんて吐かしたさうだ。然うでムいませうとも。御自分のお子さんは人にピストルを探させたり、牧師に怪我をさせたり、人を窓から下りさせたり、少しも悪い事なんかしないのですからねえ！

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今日はお客に來た綾子さんといふ小い女の子が大瓶へ落ち込むで大騒ぎだつた。料理人が梯子を掛けて引つ張り上げると、綾子さんのお母さんは狂人のやうになつて、雫の滴れてゐる綾子さんを抱き占めた。お母さんは早く毛布を溫めませんかと、お歌姉さんを叱りつけた。お島の狼狽者は近所へ醫者を呼びに駈けて

行つたけれども、考へて見れば結局那麼騒ぎを入れる必要は些つともなかつたのである。瓶へ落ちたのは綾子さんぢやない、乃公が拵へた藁人形だ。乃公だつて若し眞正の綾子さんが落ちたのなら司馬溫公のやうに瓶を破つて助ける位の事は心得でゐる。唯あゝつて言つてゐるものか。乃公は眞正の綾子さんを物置の中へ匿して置いて、嘘の綾子さんを、投り込み、唯、あゝ、彼の子が落ちた、彼の子が落ちたと大きな聲を出したばかりだ、すると皆は盗賊でも見つけたやうに總出になつて那麼空騒ぎをしたのだ。料理人さへ梯子を掛けて漸つとの事で登つた所へ、那麼小い女の子が獨りで登れるか否か少しは物の道理を考へて見るが宜い。皆が馬鹿で綾子さんと人形の區別がつかないばかりに、乃公は晩飯も喰べないで室へ閉ぢ込められてゐる。乃公は決して綾子さんが落ちたとは言はなかつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今朝になつて、何人か瓶の蓋を取りつぱなしにして置いたものだから猫が落ちてゐた。しかし乃公は控り口を利くと昨日のやうに馬鹿を見るから何とも言はない。二三日すると猫がゐないといつて又騒ぎ出すだらう。乃公は決して居ない譯を説明してやるまい。今に猫の死骸の臭氣がするやうになると始めて分るだらう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今日は六公と公園へ散歩に行つたら、日外の假髪を被つた人がゐた。乃公は此禿頭のお蔭で忠公に五十錢取られてゐるから、忌々しくて此人の顔はナカ〳〵忘れられない。其時は乃公は忠公と矢張り公園を散歩してゐた。すると此人はベンチに腰を掛けみ新聞を見てゐた。其中に忠公は、彼の人は假髪を被つてゐる、那麼に若くても、假髪なんか被るものか知らといつた。乃公は假髪では現に校長の

を被つて見てゐるから、忠公より一日の長がある。で、彼は假髪ぢやない、假髪つてものは尚一層毛の長いもので年寄の被るものだと教へてやつた。けれども忠公が刺處までも假髪だ〳〵と剛情を張るので、乃公は其なら一つ賭をしやう、若しお前のいふ通り彼が假髪だつたら、乃公はお前に五十錢やるが、若し乃公の意見通り假髪でなかつたら、乃公に五十錢寄越すのだぞと申出た。忠公は無論贊成した。そこで二人は其人の周圍を三四度廻つて見たが、どうも明瞭と分らない。仕方がないから二人でチヤンケンをしたら乃公が負けて了つた。乃公は其人の前へ行つて、帽子を脱いで、極く丁寧に、假髪か假髪でないか、譯を話して、失禮ながら尋ねて見た。すると其人は憤るかと思つたら、實は僕は此間から臺灣坊主に罹つて此の通りだ、後學の爲めに見て置き給へといつて、矢庭に假髪を脱いで大きな禿を拜見仰せ付けた。忠公は何うも難有う厶いますといつてお辭儀をした。以上は乃公が忠公に五十錢取られた一部始終である。

乃公は又六公と賭をして、今度は五十錢儲けてやらう、今度は一日どころか三四箇月の長があるんだから大丈夫だと思つて、

『おい六公、彼の人は假髪を被つてゐるぜ。』

と言つて見た。すると六公は忍び足をして見に行つたが、直ぐに引返して、

『彼は假髪ぢやないよ。』

といつたから、乃公は最早占めたものだと思つた。で、忠公の時と同じ條件で賭を申出すと、六公は宜いともといつた。イヨ〳〵占子の兎だと思つて、乃公はツカ〳〵と其人の許へ進むで行つた、先のやうに帽子を取つて、

『ねえ、あなたは假髪を被つていらつしやるんですねえ。』

といつた。すると其人は莞爾と笑つて帽子を脱いで、彼の時は假髪で失敬したけれど、最早今では此通り毛が生えましたと、毫も異常のない眞正の頭を見せた。乃公は開いた口が塞がらなかつた。どうも意地の悪い頭だ。彼奴のお蔭で乃公は

都合一圓の損をして了つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

歸途に川端を通つたら、柳の木の下に此間の易者がゐて、又見てやらうと諢やがつた。乃公は鳥居つむじで懲りてゐるから、相手にならなかつたが、六公は見て貰つた。ところがお前さんは何うも氣の毒だ。運勢は好いがどうも水難の相があるといつた。六公は水難の相つて何だと訊いたら、水で死ぬ事だと言はれて、全く乃公は游泳が出來ないからと本氣にしてゐた。乃公は易者に向つて、お前こそ水難の相があるよといつたら、馬鹿をいふなといふから、乃公は突然易者を川の中へ突き飛ばしてやつた。其れ見ろ、水難の相だといつて、易者の上らない中に逃げて來た。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

乃公は停車場へ驅けて行つた。最早間もなく夜が明ける所だつた。貨車は煙を吐いてゐた。乃公は樣子を見澄まして空いてゐる車へ入り込むだ。

汽車が動き出してから、乃公は直きに眠つたものと見える。

『誰だ？　誰だ？』

と呼ぶ聲がしたから、

『僕です、僕です。お金は拂ひますから此儘連れて行つて下さい。此處にガマグチがあります。何程でも要る丈け取つて下さい。六錢五厘入つてゐます』

『一體どうして此處へ入つたのだ？』

『僕は運の惡い子で家から逃げて來たのです。少しも惡い積りはないのだけれど爲る事が皆惡くなつて、最早氣の毒で〳〵家にゐられないのです。あなたは車掌さんですか？』

其人は、車掌だが、一體何處で下りるのかと訊いた。其處で乃公は伯母さん所で

下りると答へた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

昨夜は室へ鼠が出たので夜中に目が覺めた。乃公は枕を投げつけたら、鼠に中らずに床の間の花瓶に中つた。鼠は逃げたけれど、花瓶は倒れて毀れて了つた。伯母さんは怖い顏をした。

話が後先になつたが、乃公は車掌と長い間談話をした。乃公は姉さん達の事や伯母さんの事や何から何まで話して聞かせた。車掌は大に同情してくれた。さうして自分も乃公ぐらゐの年には毎晩鞭で打たれるのが商賣のやうだつたが、慣れつ子になつてゐたから其程にも思はなかつた。だから君も打たれ慣れて一向平氣にならなくちや駄目だ。何でも慣れると樂になる。其證據には赤蛙なんかは皮を脫かれても慣れてゐるから平氣の平左で飛むで歩く。けれども姉さんの緣談を毀

したり、結婚式の邪魔をしたりするのは是からは出來るなら舍すが宜い。戰爭以來若い男といふものはナカ〳〵拂底になつてゐるといつた。

乃公は死ぬ日まで彼の車掌の顏を忘れる事が出來ないだらう。眞正に親切な人だつた。汽車賃はどうしても取らない。乃公は下りる停車場に着いた時に、車掌と握手をし、再會を期して分れた。乃公は曲馬や猿廻しは中止にして矢張り車掌にならう。彼の通り只で彼方此方乘つて歩ける上にお金が貰へるといふんだから這麼割の好い商賣はなからう。

停車場の近所に子供が大勢遊んでゐた。乃公は伯母さんに時間を知らせてある譯でもないから、仲間入りをして遊むでゐたが、どうも田舍漢は人が惡い。乃公はガマグチを取られたり、着物を破かれたり、泥を投げつけられたり、僅三時間遊むでゐる中に散々な目に會つた。乃公は十二時頃は伯母さんの家へ着いた。伯母さんはお晝を喰べてゐたが、乃公の姿を見ると、

『まあ太郎、今頃まあ何うして？』

といつて、破れたかと思ふ位大きな音をさせてお膳の上へ茶碗を置いて、

『一體何處から來たの？　まあ其着物は何うしたの？　顏を傷だらけにして！』

と驚いた。

『伯母さん、僕は嘘は申しません。家から逃げて來ました。』

と乃公は全く正直の所を答へた。すると伯母さんはお歌は那麼いふ人並の子ぢやないのだからお前の逃げて來るのも道理だと言つて乃公に同情を寄せてくれた。で、乃公は大阪の伯父さんの頭が破損した事や三日續け樣に藏へ入れられた事等は割愛して、大人になる迄伯母さんの家へ置いて呉れと賴むだ。伯母さんはお父さんと相談して然ういふ事にしてもいゝが、それには大人なしくして働いてくれなくちや困ると答へた。ところへ家から伯母さんへ宛て、

『タロウイツタカ』

といふ電報が來た。電報は元來便利なものだけれど、這麼時には極めて不便なものだ。伯母さんは何うするかと思つて見てゐると、

『キテヰル、アンシンセヨ』

といふ電文を認めたから、乃公は吃驚して、僕が出して來て上げませうと言つたさうしてお晝を喰べてから又停車場へ引き返して、

『コナイ、キタラシラセル』

と改良して返電て打つて來た。忠公丈けには話して來たが、決して喋らないと指切りをしたから安心だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

暖い家庭を離れて二日になる。どうも伯母さんが乃公を扱き使ふには驚いて了ふ。朝から晩まで庭の草を拐つたり、干物をしたり、鷄に餌を遣つたりさせて置

きながら、伯母さんはお前は遊むでゐると、粗相ばかりして仕樣がないといつた。他の子供と遊ばせもしない。乃公は二度まで停車場へ行つて、彼の親切な車掌は通らないかしらと番をしてゐた。家鄕病は恐ろしいものだ。

干した豆を物置へ搬むでゐたら、物置の奥に蜂蜜が澤山仕舞つてあつた。乃公は善い物を見つけたと思つて、蜜を舐めては豆を取込み、豆を取込むでは蜜を舐めた。仕事が濟むでからも空樽の中へ匿れて、螢を舐めながら家へ歸る事を考へてゐた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

何だか妙に身體が動くと思つて目が覺めた。目が覺めて見ると實際動いてゐる。動いてゐる所ぢやない。前と後ろと人がゐて、乃公を擔いで歩いてゐる。氣がつくと乃公は先刻から蜜樽の中に寢てゐたんだ。耳を澄まして段々と談話の樣子を

聞けば、此奴等二人は泥棒だ。伯母さんの家へ蜜を盗みに来たのだ。さうして一番重い奴に一番澤山入つてゐると思つて、乃公の入つてゐる樽を擔架のやうなものに乗せて、唯今擔いで行く最中なのだ。現に、

『此重量ぢや大分濃からうぜ。一寸嘗めて見ねえ。』

といつてゐた。乃公は泥棒に舐められちや大變だと思つた。一體どんな奴だか顔を見てやりたかつたけれど、眞の闇だから些つとも分らない。乃公は樽から手を伸して、前の泥棒の頭の毛を一寸引つぱつてやつた。

『いてえ〳〵、冗談するねえ！』

と前の泥棒が言つた。

『何を言つてやがるんでい。此のとんちきめ！』

と後ろの泥棒が返辭をした。乃公は是は面白いと思つて、又ぐいつと引張つてやつた。

『いてえ〳〵、ひどい奴だ。冗談するなつて事よ。蜜が零れたら何うする。人の頭を引つぱりやがつて、商賣がらたあ言ひ條、餘つ程手の長い野郎だ！』と又前の奴が言つた。

『とんちきめ！　考へて見ろ！　斯う兩手がふさがつてゐてお前の頭が引つぱれるかい。冗談いふねえ！』

と又後ろの奴が答へた。

『あいて〳〵、おちゝゝ、ひつぱるなつて事よ！』

『ひつぱりやしねえよ！』

乃公は少時控へてゐたが、兩方共ブツ〳〵いひながら擔いで行く。もう少しで笑ふ所だつたが、今度は拳骨を固めて息を吹つかけて、乃公は後ろの奴の頭を思ひ樣打んなぐつてやつた。

『擲つたな！　畜生！　手前こそ手が長い。』

と今度は後ろの奴が怒り出した。

『擲るもんかい。手前こそ散々人の頭を引つぱつて置いて、言ひがかりをしやがる。斯う手がふさがつてゐて……あいてく、又引つ張りやがつたな。』

『あいてく、又擲りやがつたな。』

『あいてく。』

『あいてく。』

二人は到頭樽を下して、取組合を始めた。乃公は樽を擔いで、スタコラくと逃げ出した。幸ひ一本道だつたから間もなく伯母さんの家へ着いたものゝ、どうも危い所だつた。若し目が覺めないでゐやうものなら、今頃は泥棒に舐められて了つたかも知れない。伯母さんに泥棒の話をしたら、伯母さんは喫驚して物置へ駈けて行つたが。一樽も盗まれてゐなかつた。泥棒の方でも喧嘩が濟むでから嘸喫驚したに相違ない。蜜ち樽も逃げて了つたのだから。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

お父さんに連れられて家へ着いた時の事を考へると今でも涙が出て來る。お母さんは嘆泣をして乃公を抱きしめた。姉さんは乃公に接吻をした。料理人さへ鼻聲を出してゐた。お島は前掛を顔へ當てゝゐた。乃公が逃げたので家では大騒ぎをしたさうだ。多分人さらひに攫はれたのだらうといふ評判だつたさうだ。お父さんは伯母さんを慍りつけたが、樣子が知れて、結局乃公ばかり惡い事になつて了つた。今度は然うでムいますよぢやない、全く乃公が惡るかつた。乃公は干して來いといはれた豆を賣つて來て金を拵へ、其足で停車場へ行つて、迎に來るやうにと家へ電報を打つたのだ。眞正に皆に心配をかけて濟まなかつた。是からは心を入れ替へて大人なしい子にならう。

大に奮發して善い子にならうといふ第一日だ。學校へは十分早く行つた。常に定刻より十分早く行く人は成功すると日外先生がお話をした。遊び時間には能く遊び、授業時間には能く學むで、學校が濟むだら、傍目もしないで家へ歸つた。

家へ歸つたらサンフランの親方がお父さんと碁を打つてゐた。仕事に來てゐながら、仕事が濟むでも歸らずに碁を打つたり盆石を弄つたりしてゐる。此間なんかは小僧が迎ひに來ても平氣で碁盤を睨めてゐた。斯ういふ事は確かに道草だと思ふけれど、大人なら道草を喰つても宜いのか知ら。お父さんだつて會社の歸途に何とか軒へ寄つた等といふ事が度々ある。是は道草どころぢやない。御馳走を喰べてお酒を飲むでそれで晩くなれば泊つて來るのだから非道い。けれど大人になれば其でも宜いものと見える。大人は大人だ。子供は子供だ。乃公は是から學校で習つた所を復習しなけりやならない。

復習が濟むでから、お父さんの郵便を出しに行つてやつた。這麼に大人なしく

しても未だ何人も褒めてくれないから、

『おい、善い子だつて言へよ。』

と乃公は郵便箱を擲つてやつた。郵便箱は人間ぢやないから少し位擲つたつて構はない。尤も忠公のやうに蛙なんか入れて、郵便屋を蛙のやうに飛上らせたりすると惡戯になる。

日が暮れてからお父さんの書齋へ夕刊を持つて行つてやつた。尙ほ庭に盆栽が一つ殘つてゐたから、雨が降ると惡いと思つて、取込むで置いてやつた。それからお父さんがお湯から上る時に、おい、誰か乾いたタウルを持つて來ておくれといつたから、乃公は直ぐに乾いたタウルを持つて行つてやつた。

お島に此位なら何うだらうと訊いて見たら、何がですと訊き返した。何がつて、大人なしさがさと答へて此日記を見せたら、まあ坊ちやんは何でもつけて置くのねと驚いてゐた。先づ〳〵第一日は成功だつた。けれども三日坊主ぢや駄目だ。

どうもけれどもといふ奴は厄介な奴だ。明日も大に氣をつけやう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今朝は七分前に學校へ行つた。昨日よりか三分いけなくなつた勘定だ。けれども器械體操へ飛びつき損つて息が止つた丈けで、其外には些つとも惡い事はなかつた。

學校から歸つて森川さんの所へ行つた。森川さんは乃公が行方不明になつた時大層心配してくれたさうだから、是非行つてお出とお母さんが言つた。途中で、六公に遇つたけれど、乃公は道草は喰はなかつた。尤も六公が七つ道具になつてゐるナイフを賣りたいが買はないかといふ相談を持かけたので、値段と賣買の日時を定めるのに一時間ばかり掛つた。ナイフは善いナイフで二十五錢ぢや只見たいなものだけれど、實はお客さんに貰つたのだから、其お客さんが歸る迄は賣る

譯に行かないんださうだ。

間宮は相變らず藥を弄つてゐた。生憎の事に森川さんもお春姉さんもお不在だつた。森川さんは先刻急患があつたので未だ歸つて來ないし、姉さんはお畫からお友達を訪問に出かけたさうだ。筍は流行るかと訊いて見たら、まあ中等の所だが、今年は流行病がないから比較的閑散だと丁度森川さんと同じやうな事を言つてゐた。どうもお前ん所の商賣は冥利が惡いね、病人があればいゝ病人があればいゝと始終思つてゐるんだからといふと、未だ惡い商賣がある。其は葬儀社で、彼奴等は人が死ねばいゝ死ねばいゝと思つてゐる。其で少しも惡いと思つてゐないから尙ほ太いや。日外なんか陸軍衛戍病院御用といふ廣告を出してゐた葬儀社があつたくらゐだ。商賣つてものは何にしても然うだ。辯護士は訴訟があればいゝあればいゝと思つてゐる等といつて醫者を辯護した。此筆法で行くと商賣つてものは、人の惡い事を願ふものだ。即ち先生は生徒が出來なければいゝ出來なけれ

ばいゝと思ひ、軍人は戰爭があればいゝあればいゝと思ひ、裁判官は何人か詐僞取財をすればいゝすればいゝと思ひ、ランプ屋はランプが破れゝばいゝ破れゝばいゝと思ふ勘定になる。全くサンフランの親方等は彼の人の頭の毛が早く伸びればいゝ伸びればいゝと思つてゐるに相違ない。して見ると親といふ職業は何ういふものだらう。間宮の説によると、どうしても子供が惡戯かお轉婆をすればいゝすればいゝと思ふ事に歸着する。それにお客さん等が來ると、

『どうも、いたづらで困ります。』

等とお父さんが自慢さうに乃公の事を吹聽する所を見ても、

『いや、お小い時はお活潑でゐなさる方がお宜しうムいます。』

等とお客さんが相槌を打つ所を推しても、どうも間宮の説は背察に中つてゐるやうだ。尤も彼奴の議論が背察に中らうが鬼門に當らうが、約束は何處までも約束だから仕方がない。乃公は大人なしくする約束をして了つたから、當分は動きが

取れない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今日は五分前に學校へ行つた。明日から見ると又二分、一昨日から見ると五分惡くなつた勘定だと思つて、少々悲觀してゐると、果せる哉、秀公が馬鹿だものだから、先生は秀公の机から乃公の机へ掛けた電信を見つけて了つた。二人共可なり叱られた。一度ある事は二度あるものだから、内々用心をしてゐたのだけれど、三時間目には机の中の南京豆を見つけられて、一時間殘されて了つた。

家へ歸つたら陸軍の士官がお客に來てゐた。家へ士官が來るなんて珍らしい。何んな人だらうと思つて見に行かうとしてゐると、忠公がやつて來た。

『やあ、陸軍の帽子を被つてゐるね。能く似合ふぜ。僕にも一遍被らせて呉れ給へ。』

『那麼大きな聲を出すなよ。馬鹿だなあ。』

等と少時は二人で赤い帽子を被つたりしてゐたが、其中に忠公は、君の帽子へ此帽子の徽章をつけて見給へ屹度いゝぜ、と言つた。で、乃公も一寸其氣になつて、直ぐに陸軍の徽章を自分の帽子に附け更へたが、今考へて見ると、忠公が惡魔で乃公を誘惑したのだ。成程能く似合ふ等と言つてゐる間に、忠公は乃公の徽章を士官の帽子に附けて了つた。ところへ客間の戸が開いて、お父さんが士官を送つて玄關へ出て來た。

『これ〳〵、お客樣の帽子を弄つたりして！　早くお返し申せ。』

とお父さんが言つたものだから、乃公は仕方なしに其儘軍帽を渡してやつた。すると軍人は乃公の頭を擦つて、

『坊ちやんも軍人になるかな。』

とお愛想を言つた。さうして鞆繪學校の徽章をつけた儘で、威張つて歸つて行つ

た。明日は屹度鞆繪學校の徽章をつけた儘で號令をかけるのだらう。どうも忠公は惡い事をする奴だ。今日こそは乃公の所爲ぢやない。全く忠公の所爲だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今日は日曜で忠公の家へ皆が集つた。忠公のお父さんは此間から旅行してゐた。お母さんは親類に病人が出來たので見舞に行つたから、晩までは大丈夫だ。さうだ乃公達は客間で演說會を開いた。辯士は乃公で、忠公が開會の辭をやつた。乃公の演題は、

『空中飛行實驗談』

といつて、日外風船へ乘つて逃げた時の話だ。

『若き紳士諸君。今日は諸君の注意を物理學の方面に惹きたいと思ひます。風船並に空中飛行器の類は竟に引力の法則に打勝ち、近き將來に於て世界の交通及

軍備に一大革命を齎らすでありませうと先生が申しました。すべて空氣より輕いものは、捉へてゐないと、煙のやうに天へ昇つて了ひます。ところで瓦斯は空氣よりも輕い。此理を應用して、瓦斯を一杯つめ、綱を切り放ちますと、風船は段々昇つて行きます。其に乘つてゐたら什麼に面白からう。私は一緒に連れて行つて貰へるなら、買立の兵兵ナイフを遣つても宜いといふ決心を致しました。

そこで私は風船の持主の所へ出掛け、一應風船を褒めてからソロ〳〵用談に移りました。すると水兵ナイフは要らないと申しますから、それなら南京鼠を二疋添へやうと申しました。すると又南京鼠も入らないが、御兩親の御許可さへあれば喜むでお連れ申さうといふ事でありました。大分有望になつて來たと思ひましたが、飜つて考へて見ますと、此兩親の許可といふ奴が近頃は頗る佛底であります。我々不幸な子供は先生は罰則動物、兩親は禁止動物、といふくら

るに相場を定めてゐないと失望します。しかしながら人間が蟻のやうに見える程高い所へ登つたら、此世界は何んな恰好に見えるだらう？　もつと上へ登る、地球が獨樂のやうに廻つてゐるのを見る事が出來るかも知れない。其時一寸巨人の腕を伸して觸つたら、急に廻轉が止つて、忠公始め滿堂の諸君が跳ね飛ばされるに相違ない等と、多少研究的精神もありましたので、何うしても諦めがつかず、終局私は一人で行く決心をして了ひました。

風船は大部分絹で出來てゐて、何千圓といふ金目のものでありました。私は其晩はおち〳〵と眠られず、空を飛ぶ夢や風船から落ちる夢を見ました。さうして持主の先を越して一人で昇つちまはう——子供で風船乘をするのは恐らくは世界始まつて以來僕一人だらう——ひよつとすると臺灣あたりへ落ちるかも知れない——何處へ落ちても安心なものだ。小包郵便といふ重寶なものがあるから、家まで送り屆けて貰へる。尙ほ好い加減の所へ宙ぶらりんをしてゐると、

地球が追々回轉して、アメリカが見えるかも知れない。其節は砂を一摑み用意して行つて、ヤンキー共の頭へ打つかけてやらう。兎に角一と通り扱ひ方を呑み込むで置く必要があるから、明日の朝其となく持主と談話をして見やう、等と私は床の中で種々の空想に耽りました。

當時の事を思ひ出すと唯々不思議でなりません。彼のロビンソン・クルーソーと雖も、私の靴の中に下宿を願つたに相違ありません。最初の中は無暗に面白かつたが、其から後は唯恐ろしい一方で、私は家へ歸つてから、乃公の頭の毛は白くなりはしないかとお島に尋ねた位でした。何しろ這麼小僧さんが唯一人で、エレメントに打勝つて天に昇るといふ事の其は、實に驚く可きであります。私が綱を切つて五六間昇つた時に、今まで瓦斯をつめてゐた持主は狂亂のやうになつて其邊を驅け廻り始めました。しかし何程荒れても最早仕方ありません。私は得意になつてハンカチを振りながら見てゐると、人はダンダン小くな

る、汽車が蛇のやうに歩く、山も川も町も畑も宛然一幅の地圖のやうになる。それ迄は愉快だつたけれども其からは前にも言つた通り怖い一方でありました。もう止るかもう止るかと待つてゐても、又止めやうとして機械を弄つても、風船は益々昇るばかりで、私は其中に寒くなりました。しかし幸ひに持主は席の中へ酒とサンドウイッチを用意して置きましたから、私は少々宛ブランデイを飲むで寒氣を凌ぎ、且つ上の方へ登つて行つて、書物で讀むだ通りにナイフで二三ヶ所へ穴を明けて降りて來ました。さうしてサンドウイッチを喰べて、目の覺める頃には兎に角何處かへ下りるだらうと思つて寢て了ひました。

お島に搖り起される夢を見て目が覺しますと、最早疾うに目が暮れて、美しい月が出てゐました。私は風船に於て下りつゝある私自身を見出しました。で、先づ〳〵と安心の胸を擦りましたが、實は擦り損をしたのであります。といふのは下の方が何となく銀色に光るから、首を伸して見ると、どうも驚く、目の

届く限り一面の海ぢやありませんか。私は最早とても助らない、此處で此儘溺れ死んで了ふのかと思ひました。二度と再びお母さんのお顔を見る事が出來ないのだらうと思ひました。尙ほ今迄した種々の惡い事――何れくらゐお父さんやお母さんに御心配をかけたか――を思ひ出して、正直の所私は泣きました。同時に風船を輕くする爲めに種々と骨を折りました。即ち持主から敎はつた通り、砂袋を投棄てる積りで、頻りに動かして見ましたが、到底子供の手には負へません。それで私はイヨイヨ諦めて、殘つてゐたサンドウィッチを二片喰べ、天に在す我等の父よと主の祈りを致しました。

それから又頸を伸して見ますと、光つてゐる水の中に黑い所が見えました。私は鯨だらうと思ひましたが、五分間と經たない中に、其が小い島だといふ事が分りました。

さうして間もなく風船は鳥が木に止るやうに、其の上に下りましたが、未だ頻

りと引きずりますから、私は跳ね炭のやうに飛下りて、朝昇る時に切つた綱を松の樹に結ひつけました。尙ほ逃げられては大事ですから、幾個も〳〵結びつ玉を拵へ、少しも動かないやうにして、私は再び風船へ入り、勞れてゐましたから、其儘ぐすつり寢込むで了びました。

再び目の覺めた時には最早お日樣が昇つてゐました。私は立上つて周圍の風物を觀察致しました。一言すれば私は書物で讀むだ通り眺へ向きに無人島に漂流したのであります。若し私が日記帳を持つてゐたなら、一冊のロビンソン・クルーソーが出來たのでありませうに、是は甚だ遺憾に思ふ所であります。

そこで私は殘つてゐたサンドウィッチを二片喰べて、尙一片は大切に仕舞つて置きました。大層お腹が空いて居りましたから、此一片を喰べたいといふのが非常な誘惑でありましたけれど、私は我慢を致しました。次に私は喉が渴いて參りました。島の事ですから周圍に水が澤山ありましたけれど、私は鹹からう

と思つて居ました。が、大海へ落ちたのか、湖水へ下りたのかと思つて、兎に角一日味つて見ますと、淡水でありましたから稍元氣が出て參りました。

次に私はロビンソン・クルーソーのやうに、持つてゐる物を貯へ且つ小屋を作らうとして骨を折りましたけれど、風船は船と違つて、全く融通が利きません。第一板がない、釘がない、又ビスケットも鹽漬の牛肉もありません。で、私は風船を其儘小屋の代りに使ふので滿足しました。尙ほ動物の侵入を警戒する爲めに見張小屋を拵へたい希望でありましたが、材料もなし又動物もゐないやうだから、是も見合せて了ひました。次いで私は食人種の住むでゐる形跡はないかと思つて、島内を彼方此方歩き廻りましたが足跡も丸木舟も見當りませんでした。が、歸途に私の胸を躍らせたのは些かな文明の徵候を發見した事でありました――即ち私は腐れかゝつた錫の罐を拾つたのであります。是でも此際どんな役に立つかも知れないと思つて、持つて來て水を入れて置きました。

最早其時は大分暑くなつて來ましたから、私は再び風船へ入つて、唯一片殘つてゐたサンドウイッチを喰べ、少量の水を飲み、さうして家の方では今日がお祭りだ――嘸賑かだらう、花火を揚げてゐるだらう、皆は美味い御馳走を喰べてゐるだらうと思ふと、涙がポロ〳〵零れました。是ではならぬと思つて、頻りに目ばたきをしたけれど、矢張り駄目でした。

晝寢をして起きたら、少し元氣がつきました。そこで私は、

『ロビソン・クルソーは斯ういふ時に何うするだらう？』

『彼は島に着いてからの日數を勘定する爲めに、棒を取つて來て、其れに記號をつけて置くだらう。』

と自問自答しました。さうして私は直ぐに棒を切つて來て地面に立て、ナイフで一つ記號を刻みつけ、最早船が見えさうなものと背伸びをしました。が、船は一向見えません。

私は介殻を拾ひましたが肉は入つてゐません。腹が空つて堪らない。其中に日が暮れたから、私は風船へ這ひ込んで、夜つぴて寢通しました。

朝が來ました。私は水丈けで朝御飯を濟し、棒へ又記號をつけました。餒じくて腹が痛くなりました。家にゐる頃ポチにパンを無暗に喰べさせた事等を思ひ出しました。

餘り話が長くなりますから、私が其夕方通りがかりの船に助けられた事、家へ着く迄に三日かゝつた事、其間に三度海へ落ちた事、水夫に賴むで、今後何處へ紛失しても間違のないやうに腕へ入墨をして貰つた事、其水夫がお母さんの記念に貰つたといふ銀時計を海へ落して了つて、家へ着いてから代りを買つてやる約束をした事等は端折りまして、一足飛びに家へ歸つた事と致しませう。

船長は何れ風船を持つて後から上るといふ事で、汽車の旅は私一人でした。停車場で下りると、私は可成裏道を通つて、家へと急ぎました。窃りと歸つて行

つたら、皆は何と言つて驚くだらうと思つたからであります。家へ近づくに從つて胸がドキ〳〵して來ました。私は何人にも見られないやうにして裏庭へ廻り、茶の間の窓から覗き込みました。丁度晩御飯の時で、美味さうな物が澤山食卓の上に列んでゐましたが、皆は木乃伊のやうに唯凝つとして坐つてゐる。其中にお母さんはハンカチを目に當てた。お歌姉さんは溜息をして俯いた。お島は鼻をすゝりながら清水さんとお花姉さんに燒パンを渡した。そこで私は忽ちゴム鞠のやうに窓から飛び込むで、斯う言ひました。

『皆は家にゐて何不自由ないものだから、美味いの不味いのつて贅澤をいふ。無人島へでも行つて來るが宜い。あゝお腹が空いた。何か下さい——何でもいゝ』

是から先きのお話は私の舌では到底十分に言ひ表はす事が出來ませんから、私は此處で一と先づ幕を下します。終に臨みまして、唯一言附け加へて置きた

い事は、諸君が何んな悪戯ッ子であつても、諸君の御両親は諸君が行衛知れずになると、最早性も懲もなく何も彼も忘れて、諸君の歸るのを喜ぶものであります。お母さんは息がつまるかと思はれる位私を抱き締めて涙を流し、姉さん達もお島も太郎さん太郎さんといつて、恰も太郎が天降つたやうな騒ぎを致しました。尚ほ風船の持主はナカ〳〵意地の悪い奴で、お父さんに對して損害賠償の訴訟を起す所でありましたが、間も無く船長が風船を持つて參りましたから、圓滑に示談が調ひました。お父さんは船長に金時計と水夫にお金を贈り尚ほ姉さん達からは絹の旗を船へ贈りました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

右を見ても左を見ても知らない人はかりだ。乃公は書物で讀んだ人攫ひに合つた子供の事を思ひ出して、ヒステリイに罹つたのかと思はれるくらゐメソ〳〵泣

いてゐた。乃公は赤ん坊や女と間違られちやつまらないから、人前では滅多に涙を零さない。大抵の場合は瞬きをして我慢するが、家鄕病には敵はない。乃公の泣いてゐるのを見て、何處かの奥さんが近寄つて來た。

『坊ちやん、どうなすつたの？　お腹でも痛みますか？』

と親切な人だ。そこで乃公は今日學校へ行く途中、停車場の貨車の中で遊んでゐて、其儘眠つて了つたものだから、這麼所へ連れて來られた。お金は一文も持つてゐない。お母さんが什麼に心配してゐるかと思ふと、と又泣き出した。すると奥さんは最早泣かなくてもいゝ今夜は兎に角家へ來てお泊りなさい、明日の朝お父さんが迎ひに來て下さるやうに電報を打つて上げますからといつた。乃公は丁寧にお辭儀をして其親切を謝し、尚ほお家にはお父さんが迎ひに來る迄私と遊んでくれるやうな子供がありますかと訊くと、奥さんは、いゝえ私は未だ獨身ですと答へた。どうも話が頓珍漢だ。乃公は唯遊び相手になる息子か娘があるかな

いかを訊いたので、結婚したかしないかを尋ねたのぢやない。乃公達が着いた時は、下男は丁寧に奥さんにお辭儀をした。多分乃公にもお辭儀をするだらうと思つたら、見込が外れた。それどころぢやない、乃公を龜の子か何かと思つたのだらう、乃公の顔を然も珍らしさうにヂロ〳〵見てゐた。奥さんは、

『久吉、可愛さうに此お子さんは迷子になつて泣いてゐました。今夜は家でお世話をして、明日の朝親御さんの所へ電報を打つて上げておくれ。』

『可愛らしいお子さんでムいますね。が、逃げて來たんぢやムいますまいね――能く那麼事がムいますから。』

『大丈夫だよ。』

と奥さんが言つた。奥さんの家は好い家だ。乃公の家よりか餘ッ程綺麗だ。奥さんは乃公を奥さんの室の隣りの室の綺麗な蒲團の中に寢かした。尙ほ淋しくないやうにと言つて、仕切の戸を開けて置いて呉れた。乃公は五分と經たない中に眠

つて了つた。足が大變に痛かつたけれど、那麼事を考へる暇もない程草臥れてゐたのである。

目が覺めた時には夜が明けてゐた。お島のやうな小綺麗な女中が、直ぐお湯をお使ひなさいといつて、湯殿へ案内をして呉れた。さうして最早加減が出來てゐるから、お上りになつたら、直ぐに此方へ入らつしやい、奥さんがお待ち申して居りますからと言つた。お湯は好いお湯だつたけれど、乃公は間もなく飛び出なけりやあならなかつた程湯槽が水で一杯になつて了つた。いくら栓を捻つても追つかない。捻れば捻る程水が出て來る。乃公が上つて着物を着て女中を呼びに行く頃には、其處中池のやうになつてゐた。女中は後を拭き掃除に大骨を折つたらうと思ふ。

乃公は客間へ行つたが、奥さんは未だ來てゐなかつた。乃公は窓から外を眺めて、可愛らしい女の子が直ぐ側に遊んでゐたから、乃公は窓を明けて飛下りた。

『まあ！』
と其子は驚いて、
『貴下どなた？　中島さんのお家に在らつしやる？』
と訊いた。
『中島さんだか何だか知らないけれど、僕は此家へ昨夜からお客に來てゐるんだ。』
『嘘よ、學校着物を着てお客に來るものはないわ。』
『だつて學校の歸りにお客に來たんだもの。』
『嘘よ、お客に來たなら其處の家の名前を知らない譯はないわ。』
といふやうな會話があつて、乃公はお客に來ても名前を知らない譯を悉皆話してやつた。すると女の子はお母さんが心配して在らつしやるでせうねと大に同情を寄せた。

乃公達は考へ物をして遊んだ。女の子は清子さんといつて、ナカ〳〵の悧巧ものだ。目が大きくて、丁度夢二の描いた繪のやうな美人だ。乃公はお島との約束は破談にして、此子と結婚しようかと思つた位だ。其中に最早學校へ行かなければならないと言つたから、乃公は其邊まで送つて行つた。すると清子さんは道が分らなくなるといけないから早くお歸りなさいといつた。尙ほ斯う行つて斯う曲るんですよと指さしをして敎へて呉れた。乃公は清子さんに敎はつた通りに、斯う行つて斯う曲つて、斯う曲つて又斯う行つたのだけれど、どうしても中島さんの家が見當らない。迷子の二乘になつては大變だと思つて、彼家此家の呼鈴を無暗に鳴らして見たが、皆違つてゐる。其中に腹がへつて堪らなくなつた。
漸くの事で奥さんの家に戻つた時に、奥さんは頭を振つて、窓から出たりなんかしやちいけません——明けつ放しにして置くと盗賊が入るかも知れぬと言つた。乃公は全く自分が悪るかつた、今度だけは勘忍して下さい、迷子になる積りぢや

なくて、唯お隣りの女の子とお話をしようと思つたのですと辯解した。奥さんは御飯をお上んなさい、お腹が空いたでせうといつて、乃公を茶の間に案内して呉れた。乃公は喰べながら、校長の鬘を焼いて退校になつた事、森川さんの結婚式の事、獅子と一緒に夜逃げをした事等、種々話して聞かせた。奥さんは或時は笑ひ或時は驚いて兩手を擴げた。給仕をした女中は臺所へ這つて行つて着物に綻びの切れる位笑つた。馬鹿な奴だ。

御飯が濟んでから奥さんは、

『太郎さん、私はこれから太郎さんのお父さんの所へ電報を打ちに行つて參りますから大人なしくしてゐて頂戴よ。此處に面白い御本がありますから、此室で讀むでいらつしやい。私は一時間と經たない中に歸つて參りますから。』

といつて、乃公の頭を撫ぜて、書物を渡して出て行つた。

久吉は食卓の後始末をして、臺所へ引込んで皿だの匙だのを磨き始めた。此處

の茶の間は家の茶の間よりか綺麗だと思つた。日の光が差し込んで居心が好い。鳥籠が二個あつて、カナリヤが頻りに囀つてゐた。奥さんの大切の三毛猫はストーヴの前に座蒲團を敷いて、朝つぱらから悠長に晝寢をしてゐた。三毛でも斯ういふ三毛は鼈甲猫といつて滅多にないものださうだ。乃公は本を讀みながら善い事を考へ出した。すべて鳥や獸の聲には其相應の意味があるのだけれど、唯聞いては分らない。然しながら猫の鬚を切つて耳に當てゝゐると、其言葉の意味が能く分るさうだ。是は以前から聞いてゐる話だけれど、未だ忙しくて試す暇がなかつた。一體彼のカナリヤは何を言つてゐるのだらうと思つて乃公は猫の鬚を五六本引つこ抜いて、耳に當てがつて見たが、一向分らない。是は鬚の數が足りないのだらうと思つて、猫を苛めちやいけませんよと久吉が間抜顔を出した頃には、乃公は三毛の鬚を皆抜いて了つた。少時は鬚を耳に當てがつて書物を讀んでゐたが、カナリヤ語も聞き取れず、本に書いてある事も分らず、乃公は全く退屈して

了つた。

其中に猫は鳥籠の方を向いて、時々妙に目ばたきをする。乃公は何うするのかと思つて、讀みながら番をしてゐた。乃公は片方の鳥籠を明けて、又讀書を續けた。カナリヤは直ぐに籠から出て、食卓の上で面白さうに遊び始めた。乃公は片目で猫の番をしながら、又五六頁讀んだ。最早眠るのだらうと思つてゐたら、三毛は急にカナリヤに飛びついた。籠の中のカナリヤがバタバタ騒いだので、久吉が又間抜顔を出した。けれどもどうせ間抜の事だから、晩かつた由良之助で、三毛は最早罪も科もないカナリヤを殺して了つた。猫が殘んでゐた。仕樣がない奴だ。

久吉は喰ひつきさうな顔をして、奥さんは什麼に力を落すか知れない、是は一番好いカナリヤだと言つた。其時に丁度戸が明いた。乃公は青くなつたり赤くなつたりした。奥さんはニコ〳〵しながら入つて來て、

『お父さんから御返事が參りましたよ。夕方の五時の汽車で此處へお見えになるさうです。』

と言つたが、食卓の上のカナリヤに目がついて、

『是は何うしたのです？』

と久吉に訊いた。久吉は恐れ入つてゐる。乃公はワシントンのやうに進み出て、

『私が致しました。眞正に惡い事をして了ひました。私は唯カナリヤに少し運動をさせようと思つたばかりです。私は嘘を吐く事が出來ません。猫が殺して了ひました。』

奥さんはカナリヤを持つた儘、其場へ坐ツて泣き始めた。乃公は氣の毒で氣の毒で、壁の中へ消え込みたい位だつた。

『太郎さん、眞正に仕樣のない事をして下さいましたね。這麼事になるとも知らないで……私は眞正に昨夜お前さんを連れて來なければ宜かつたと思ひます。』

と奥さんはナカ〳〵泣き止まない。そこで乃公も泣き出して、眞正に何とも申譯がない、自分は是迄人に迷惑のかけ通しで、此上は一層の事死んで了はうか、それとも人のゐない島へでも行かうかと思つた事が何遍あるか知れない、善い子にならう、善い子にならうと苦心しても、どうしても惡い事ばかり湧き出して來るので、終には往來へ出て人に顔を見られるのも耻しくなつたと言つた。すると奥さんは最早泣かなくても宜い、私も諦めるからといつた。そこで乃公は何故奥さんは子供をお貰ひにならないのです、家に子供があると他所の子供が少し位惡い事をしても餘り慣れないやうになるものですからと後學の爲めに教へてやつた。すると奥さんは子供なんかない方が世話が燒けなくて宜い――財産は皆慈善事業に寄附して了ふ積りだと答へた。乃公は少し口惜しかつたから、それなら、あなたは老孃ですかと訊いてやつたら、口の惡い人は能く那麼事を言ふけれど、那麼事は一向氣にしないと言つた。老孃だと男の人が大勢遊びに來るでせうと訊いた

時に、女のお客が來たので、奥さんは客間へ出て行かなければならなかつた。

『太郎さん、直きに歸つて參りますから大人なしくしてゐて頂戴よ。ね。此處に鉛筆と紙がありますから、然うして指で窓へ描かずに、是へ何か繪を描いて御覽なさい。お客樣がお歸りになつたらお書に致しませう。最早籠へ觸つちやいけませんよ。善い子ですね。』

乃公は間もなく紙へ一面に繪を書いて了つて、猫の方を見た。さうして此猫の背中の斑點は宛然世界地圖のやうだと思つた。斑點が大陸と島で、白い所が海だ。一々名をつけて置くといゝ。尙ほ背中へ經度と緯度を書き込むと本當の地圖になると思つて、乃公は火箸は眞赤に燒いた。けれども猫なんてものは人の好意を何とも思つてゐないから、乃公が二本ばかり背中へ筋を引くと、三毛は泡を吹いて唸り出した。久吉は厭な臭氣がするものだから又間拔顔を出した。其時には最早猫は背中が熱いものだから、違ひ棚へ飛上つて、三百年以來此家に傳つて來たと

いふ何とか燒の花瓶を落して紛々にして了つた。どうも仕樣のない奴だ。

『見ろ、此いたづら小僧め！　カナリヤと三毛と此花瓶はな、奥さんが子供よりも大切にしてゐなさる品物だ。其カナリヤは殺し、三毛は此通りにする、加之に花瓶まで毀して了ひやがつて！　おれが手前なら最早氣の毒で氣の毒で迚も斯うして家にゐられる筈のものぢやねえ。門の所へ行つて親父の來る迄待つてゐろ！』

と久吉は今にも擲りさうにした。乃公は其權幕に怖れを爲して、ガタ〳〵慄へながら、

『ぢや臺所の隅で待たして下さい。』

といふと、久吉は、

『料理人が御免だといはあ。』

といひながら乃公を突き飛ばした。

『ぢや僕は寢室へ入つてゐます。』

と乃公は其儘二階へ駈け上つて、鍵をかつて了つた。全く最早奥さんに合はせる顔がないと思つた。奥さんは最早お晝ですからと女中を使に寄越した。けれども乃公は家鄉病で何にも喰べたくないと鍵の穴から呶鳴つてやつた。奥さんもヨイ〳〵乃公に愛想を盡かしたと見えて、其儘打棄つて置いてくれた。乃公は少時の間泣いてゐたが、最早彼此三時だらうと思つたら、急に元氣が出て來た。乃公は最早清子さんが學校から歸つて來さうなものだと思つたから、窓を明けて彼方此方を眺めてゐた。すると方々の家に旗が出てゐるのに氣がついた。乃公の寢臺には赤い蒲團があつたから、乃公は其皮を剝がし、尙ほ寢臺の下の金棒を一本外して赤旗を拵へ、世間並の積りで窓から出して置いた。

少時すると人が大勢來始めた。呼鈴が頻りに鳴る。

『中島さんのお家に今日競賣があるとは些つとも知りませんでした。』

『私も。』
『歐羅巴へでもいらつしやるのでせうか？』
『然う。那麼お話も殆んと承りませんでしたがな。』
『兎に角一度お家の内部を悉皆拜見したいと思つてゐた所ですから、丁度好い都合です。』
『入札でせうか？　其れとも眞正の競賣でせうか？』
『さあ。』
等とガヤ〳〵言つてゐる。大方二三十人も集つたと思ふ頃、久吉はキヨロキヨロ眼をして階段を上つて來た。さうして赤い旗が目につくかつかないに、乃公の室の戸を破れる位叩いた。乃公が明けてやると、乃公を押し倒すやうにして窓へ行き、旗を下して、
『仕様のない餓鬼だ！』

と睨みつけた。ところへ奥さんはヒステリーのやうに泣き笑ひをしながら上つて來た。時計を出して見て、
『久吉や、もう四時だよ。もう一時間だから安心おし。』
と言つて父乃公の顏を見た。乃公は眞正に氣の毒だつた。それから奥さんは乃公を茶の間へ連れて行き、お腹が空いたでせうといつてお菓子を呉れた。尙ほ太郎さんのお母さんは是で能く生命が續くかと思ふと不思議でならないと言つて、乃公の顏を見世物か何かのやうに何時までも見てゐた。のみならず乃公を凧か何かと間違へたのだらう、五時の鳴る迄凝と乃公の手を捉へてゐた。五時二十分過ぎに呼鈴が鳴つて、お父さんの聲が聞えた。
お父さんは奥さんに萬謝して、別段の御迷惑をかけなかつた事を希望すると言つた。それに對して奥さんは唯妙な笑顏で答へた。久吉が何か言はうとしたら、奥さんは目で制めた。するとお父さんは乃公を頭の天邊から足の爪先まで見つめ

て又奥さんに幾度もお禮を言つた。乃公も奥さんの手を握つてお禮を言つた。尚ほ何卒お母さんや姉さんの許へお遊びにいらつしやるやうに頼み、雙方涙を流す事少時あつて、乃公達は奥さんに別を告げた。道すがらお父さんは頻りに考へ込んでゐた。乃公も頻りに考へ込んでゐた。お父さんは斯ういふいたづら小僧に呆れて了つて、何うしたものかと思つてゐたのらしい。乃公は又乃公で、考へて見れば悪い事をする料簡は少しもないのに、どうして斯う悪い事ばかり起つて來るのだらうと思案に餘して居たのだ。さうして乃公は這麼悪い事や悲い事や人に笑はれるやうな事を日記帳に書くのが耻かしくなつた。で、是から一奮發して、眞正に善い子になる迄は再び日記をつけない決心である。

續いたづら小僧日記 終

おてんば娘日記

太郎さんの日記を讀むまで、私は日記をつけやう等とは思ひもかけなかつた。太郎さんが箸の上げ下ろしに悪戯だ〳〵と言はれるやうに、私はお轉婆だのお跳ねだのと、日に何度言はれるか知れない。けれども果して私が然うしたおてんば娘でせうか？　大人は厳制なものです。私は眞正に太郎さんに泥鰌を寄せる。

私は些ともおてんばだとは思はない。唯分らない事が澤山あるから、其が知りたさに種々の事を訊くのです。菊は一時の恥といふぢやありませんか？　若し腑に落ちない事を其儘にして置いたなら、如何して智慧がつきませうか？

私は日記帳がない。それに誕生日でないから、太郎さんのやうに買つて戴く譯に參りません。で、據ろなく私は兄さんの買立の小遣帳を拜借致しました。幸ひ未だ一頁しか書いてない。其は難なく搖り取つたけれど、葉卷十本三圓七十錢、夏帽子八圓五十錢、アイスクリーム一圓五十錢には驚いて了つた。一人で六皿も喰べたのだらうか？　胃腸が弱いもないものだ。もう更衣の時だといふに、私のお人形さんは如何でせう？　買つた時の着のみ着のまゝでゐるぢやありませんか？　さうして姉さんも蝙蝠傘が流行に後れたと口癖のやうに仰有つてゐるに、眞正に恥を知らない仕打といふものです。親の脛をかじつてゐる癖に！

親脛ですとも！　卒業したつて脛つかじりだわ――金歯を入れてゐるのが何よりの證據です。卒業前から文學士といふ名刺を拵へて、大臣にでもなるやうな大騒ぎをした人が、まあ如何でせう、此頃では日々毎日中學校へ行つて、

『親愛なる私よ！　親愛なる私よ！』と小き蜜蜂が鳴きし、『私は常に蜜を造りつゝある。遊ぶ可き時を持たぬ。然しながら終日働く其が甚だ可笑くあらぬか、甚だ〳〵可笑しくあらぬか？』

等と生徒さんを困らしてゐる。可笑くあらぬかもないものです。お友達は皆ナショナル男だといつて笑つてゐる。ナショナル男が十本三圓七十錢の葉卷を喫むなんて間違つてゐる。けれども本人はあれでナカ〳〵負惜みが強い。今月の雜誌には文學士ナショナル男爵といふ匿名で、何だか六ケ敷い事を書いてゐる。どうも文學士が好きなのには驚いて了ふ。此間は盥の裏に己酉暮春新調、文學士五風十雨樓主人と書いたので、お父さんは、仙一はダン〳〵馬鹿になるやうだと感心なすつた。

それは然うと此帳面に挾んであつたお寫眞は何時頂いて來たのだらう？　矢つ張り雪子さんの方が姉さんより綺麗のやうだ。此リボンは屹度私のお人形さんと同一よ。裏に何か書いてあるけれど、英語だから解らない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今日は兄さんが大層不機嫌でゐなさる。雪子さんところへいらつしやつたお留守の間に、生憎私の鍵か兄さんの机の引出に合つたものだから、一體私に何を買つて來て下すつたらうと思つて、不覺搔き廻して見たら、お手紙が澤山あつた。私の拜借したのは二通共雪子さんからのお手紙でしたが、其を讀み終らない中に、私は手を捩られた。

『あら、そんなに酷い事を爲さらんでも宜いわ、一寸拜借したばかりですもの。』

『黙つて取るのは拜借ぢやないよ。』

と兄さんはお手紙を引奪つて了つた。眞正に亂暴つてありやしない。私おばあさんに言つけてやるからいゝわ。

お書飯が濟んだ時に私は兄さんの袖を引張つて、

『ねえ、兄さん、雪子さんは何を考へてゐなさるのでせうねえ？　能うく考へて見てからでなくちや御答が出來ませんて——兄さん何か考へ物でもお出しになつたの？　中れば御褒美があるのですか？』

私は何故兄さんが那麼に耳の根元まで赤くして、急にお父さんの方へ向き直つて、調子外れの高い聲を出して、頻りに株の上つたお話を始めたのか、其理由が聞きたい。尙ほ姉さんが急にクス〳〵と笑ひ出して、兄さんに代つて、

『考へ物よ。大懸賞の考へものよ。中れば金指輪よ！』

と答へてハンカチを銜へた譯も知りたい。

どうも兄さんや姉さんの仰有る事は分るやうで分らない。人生は謎とやら言ふけれど、私は其れよりも先づ大人は謎だと言ひたい。全く考へ物です。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

先刻から兄さんのお友達の東益さんが來てゐなさる、東益さんもナシヨナル黨で、兄さんが男爵なら、此方は伯爵ぐらゐの所でせう。姓は東益、名は條治、號は沛亭、東益條治といへば如何にも英語の先生らしく、東益沛亭といふと何うや ら涙香の探偵小説に出て來さうだと姉さんが仰有つた。けれども、姉さんは此方が大好きよ。私ちやんと見屆けた事がある。さうして此方から獨逸語のお稽古と英語のお復習をして貰ひなさる。兄さんは少し覺えが悪いと直ぐに馬鹿だの劣等動物だのとお言ひなさるから、疾うの昔に姉さんの家庭教師を免職になつて了つた。兄姉の間は兎角我儘があつていけないものださうです。

東益さんのお歸りの時、姉さんは必ず御門まで送つて行く。什麼お話があるかと思つて、私は此間の晩植込の中に匿れてゐたら、二人は其と知らずに御門まで來て握手をした。さうして東益さんが五六間行つてから、姉さんは、

『あなた、一寸々々。』

と呼んだ。するとイツヒ・リーベは疾風のやうに引返して來て、

『何か御用ですか？』

と尋ねた。姉さんは再び其手を握つて、

『何でもないの。電車に飛乘なんかなすつちやいやよ。』

と言つた。何の事です。馬鹿々々しい！

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

矢張り私はおてんばだと思ふ。烏の鳴かぬ日はあつても、私がおてんばだと言はれない日はないのですから、其に相違ありますまい。兄さんは私は人に迷惑をかける爲めに何かの約束事で生れて來たんだと言つてゐらつしやる。然うでムいませうとも！

然うでムいませうとも！　私は生れた時の事を能く覺えてゐます。此人の世に

私が最初の泣聲を揚げた時、お父さんは駈つけて來て、
『どうだ、徴兵ものか？……や、又女か！』
と失望なすつた。又女か！なんて隨分だわ。男ばかりの世界ぢやあるまいし。すると其後へ兄さんが又人眞似子眞似をして飛んで來て、
『や、又赤十字か！』
姉さんまで向ふ組になつて、
『お隣りでは男だつたのに…』
と殘念さうなお顔をなすつた。宜う厶いますよ！　人が折角生れて來て上げたのに。それから、
『お前方はどうしたものだ。こんな輕いお產を喜ぶことも知らない。罰當りが！早く鹽釜樣へお燈明をお上げ。』
と皆がおばあさんに叱られた時には、眞正に好い氣味だと思つて、赤ん坊ながら

溜飲が下つた。さうしておばあさん丈けは賴もしい人だと思つてゐました。
けれども七夜の晩に私は困つて了つた。お父さんは、
『實業家の子だ。極く平民的の名をつけやう。梅子はどうだ。お梅が宜からう。』
と仰有つた。するとおばあさんは、
『花子はお前が名をつけたものだから、那麼可愛い子だつたけれど、二歳の時にジフテリアで取られて了つた。一度ある事は二度ある。二度ある事は三度あるものだから、お前は此子が可愛いなら、名をつけることは控へてお呉れ。お前の爲めには子だらうが、私の爲めには大切の孫です。滅多な名前はつけさせませぬ。』
と抗議を申込んだ。實際私の直ぐ上の姉さんは私の生れない中にジフテリヤで亡くなつたのです。ところへ其頃中學生で生意氣盛りの兄さんが、
『そんなら千歳は如何でせう？　千歳子なら長生をしますぜ。』

と得たり賢しと洒々り出たが、
『そんな料理屋見たいな名が何になるか。』
とお父さんは頭ごなしに極めつけて、ブリ〳〵なすつた。
『それでは一體どうしたらいゝのでせうね？』
とお母さんが困つたやうなお貌をなさると、
『私の意見を訊いて御覽。』
とおばあさんが鼻を動めかした。おや、おばあさんに意見があると見える。
『ではお母さんに何か好いお考へでもムいますか？』
とお父さんが驚いて訊くと、おばあさんは落着いたもので、
『私の名を取つてお龜とつけなさい。私も此通り長生だし、鶴は千年龜は萬年と申して、お龜は決して悪い名ぢやありません。是非お龜になさい。』
さあ大變な事になりました。鶴子なら異存もないけれど、龜子だのお龜だのつ

て厭な事です。假名で書いて御覽さない。おかめさんぢやありませんか。で、私は小い手足を動かして懸命に泣きましたが、赤子の言葉が大人に通ぜず、お母さんはおばあさんの氣をかねて、
『お龜にしませう。ねえ、あなた、長生しさうな好い名ぢやムいませんか。』
お父さんは六ヶ敷いお顔をして默つてゐらつしやつたが、おばあさんは、
『然うとも〳〵、お龜に限る。龜の甲より年の功といつて、お飾りの數を餘計に潜つた者の言ふ事に間違はない。』
と仰有つて、私は到頭其儘お龜になつて了つた。今考へて見ると、軍艦のやうだけれど千歳の方が餘つ程好かつた。西も東も分らない者を捉へて眞正に無理な人達だわ。私は赤ん坊ながら、大人は壓制なものだと思つて、くやしくて〳〵其晩はよつぴて泣き明かし、曉方には引きつけて、お醫者を招ぶやら大騒ぎをしました。大人なら癇を起したといふ所でせう。

這麼いやな名をつけたものだから、皆が氣の毒がつて眞正の名を呼ばずに私の事をお跳ねさんといふのですわ。龜子さんなら未だいゝけれど、お龜さんなんて呼んでも私決して御返辭を致しませんから。はい、其お積りに願ひますよ。お分りでせうね？　はい〳〵左樣なら、切りますよ、雲子さんによろしく、チリンチリン。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

兄さんは慍りん坊です。お母さんはお代官さんだと言つてゐらつしやる。之を内にしては、今此處へ置いたばかりの眼鏡が無くなつたといつて憤る。お座敷で繩飛をしてはいけないといつて憤る。おれのヘルメットで麥魚を抄つちや困ると いつて憤る。之を外にしては、來る電車も來る電車も滿員だといつて憤る。新聞に賣藥の廣告が多くて目ざはりだといつて憤る。お隣りの書生が朝から晩まで上

杉謙信は八千餘騎を從へゐるのは、どうも彌喧しく仕方がないといつて憤る。一言すれば何でも彼でも憤つてばかりゐる。那麼に憤つてばかりゐて、蟲でも出なければいゝ。竟には自殺するかも知れない。佛蘭西には下女が無意砂糖を入れずにコーヒを持つて來たといつて、首を縊つた下宿人があつたさうだから、兄さんも何とも言へない。それに兄さんは自殺や情死は大に注目に値する現象だと言つてゐらつしやる。現象は可笑い。どんな象だらう。

けれども彼は御病氣の所爲だと姉さんは仰有つた。何でも根性ばかりでなく、鼻が大層惡いのださうです。此間お醫者さんに見て戴いたら、肥厚性鼻炎といふ病氣で、此病氣に罹ると、自然慍りッぽくなる、延いては腦を冒されるから、早晩切らなければならぬといふ事でした。其と聞いておばあさんは、

『滅多な事をお爲でない。未だお嫁も貰はない中に鼻なんか切つたりして、若し南部の鮭のやうに鼻曲りになつたら如何します？　眞正に滅多な事をお爲でな

いよ。』

と北極探檢に行くとでも聞違へたやうなお顏をなすつた。して見るとお嫁を貰つてからなら鼻は切つても差支ないのか知ら。

『いゝえ、鼻其者を切るのぢやないです。鼻の中を切るのです。餘計な骨が發達してゐるのですから。』

と兄さんは答へたけれど、おばあさんは尙ほ心元ないお顏付であつた。

のみならず兄さんは肥厚性鼻炎を多大の光榮としてゐなさる。現に先日東益さんとのお話中に、

『此故にだね、古來有名なる諷刺小說家は皆此肥厚性鼻炎に罹つてゐたといふ斷案に達する。殊に彼のイリタブルなモロースな十八世紀の鬼才ヂョナサン・スヰフトの如きは確かに肥厚性鼻炎の偉大なる者だと思ふ。僕に少し閑があるとサツターリストと肥厚性鼻炎との關係に就いて、一大論文に筆を起すのだけれ

どなあ。』

と閑で困つてゐる癖に、人聞のいゝ事を言つて歎息した。

啻に肥厚性鼻炎に限らず、兄さんが御自分の事に尤もらしい道理をつけるのは今に始つた話ぢやありません。兄さんに言はせると、人間の耳は先天的に眼鏡をかけるやうな構造になつてゐる。隨つて人間は近眼でない方が間違つてゐるのださうです。

『では鼻眼鏡はどういふものでせうか？』

と姉さんが質問したら、

『彼は普通の眼鏡の更に進化したもので、鼻眼鏡の存在は敢て僕の論據を覆へす材料にならない。』

と逃げた。

『そんなら兄さんは何故鼻眼鏡になさらんのですか？』

と姉さんに切込まれて、

『些と残念ながら、僕の鼻は未だ其程進化してゐない。』

と本音を吹いて、兄さんは些と所か大に残念のやうであつた。

十一度の近視眼といふと學術的に聞えるけれど、通俗にいへば近目ぢやありませんか。ちかめやすがめやとりめは片輪の中です。何も然う自慢する事はないわ。それでも近眼でも傍で思ふ程不便ぢやないさうで、矢張り東益さんとのお話に這麼事を言つてゐました。

『不便なのは床屋へ行つた時に、鏡に寫る自分の男ッぷりが瞭然と見えない位のものだ。』

情けない目ね！　すると同じく近眼の東益さんが眞面目腐つて、

『まだ大に不便な事があるよ。』

と抗議を申込んだ。

『何が不便かね？』

『曲線美を明瞭に認識出來ないのは唯り不便のみならず甚だ遺憾だね。』

『其は又どういふ譯か？』

『例へばだね、風呂へ行つて、女湯の方が見える事があるだらう。其時、君、近眼の悲しさは、すべて朦朧渾沌としてゐるから頗る遺憾だあね。』

知つてゐますよ。私が子供だと思つて、曲線美だなんて！　姉さんに言ひつけて上げやう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

姉さんは去年の春、女學校を卒業なすつた。方々から縁談があるけれど、未だ結婚の事なんか考へないと仰有つて、せつせと勉強してゐなさる。おばあさんはお父さんもお母さんも全然子供に甘い一方で、末の事なぞは毛程も考へないから

困る。昔ならお春なぞは最早疾うにお嫁に行つて、子供の二人もあつていゝ年頃だに、あゝして毎日々々異人さんの言葉や唱歌を習つたりしてゐる。おぢいさんがゐれば默つちやゐないのだけれど、又年寄が要らざる差出口をして悪まれるも可厭だと思つて、私は蟲を殺してゐるのだと先日仰有つた。けれどもお母さんは、身體ばかり大くても未だ、からきし赤子で困りますつて、先日何處かの方とお話をしてゐなすつた。十九にもなつてから、からきし赤子だなんて些と可笑い。尤も大人は大概赤ん坊の年の寄つたものだから、十九のねんねが無いとも限らない。おばあさんは子供に歸つてゐるとお母さんも仰有つてゐる位だから。

其のからきしねんねさんは朝からドイツ語のお稽古をしてゐる。

『お前ヂヤーマンなんか那麼に勉強して女醫者にでもなる積りかい。』

と先達て兄さんが冷嘲したら、

『いゝえ、私矢つ張り良妻賢母よ。』

と姉さんは澄ましてゐた。

『しかしあまり語學なんか勉強すると、家庭を持つときのヂヤーマンになるよ。』

と兄さんは仰有つて、爲たり顔をなすつた。何の事だか私には勿論、姉さんにも分らなかつたけれど、兎に角姉さんの思想は至極穩健だと思つて、私は喜んでゐる。

『汝は鉛筆を持つか？』

『然り、私は鉛筆を持つ。』

『カールは鉛筆を持つか？』

『否、彼は鉛筆を持たぬ。』

『マリーは鉛筆を持つか？』

『然り、彼女は鉛筆を持つ。』

と、獨逸語は何處まで行つても鉛筆の事を訊く。彼等獨逸人は頗る鉛筆を大切

にする國民にあらざるか？　然り、彼等は甚だ鉛筆を好み、鉛筆のサラダを喰ふ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『今日は八圓五十錢の散歩をした。』

と言つて、兄さんが歸つて來なすつた。

『どうなすつたの？　掏摸にでも會ひましたか？』

と姉さんが訊くと、

『僕は掏摸に遭ふやうな間抜ぢやないが、先日買つたばかりの萬年筆を失して了つた。公園で機械體操をした時に落したのだと氣がついて直ぐに引返して見たけれど、最早駄目だつた。』

『眞正に公園でお落しになつたなら、もう駄目でせうが、又何處かへ置忘れたんぢやなくて？　先日なんか風呂場へ眼鏡をお忘れなすつて、龜子さんを泣かせ

たり、大騒ぎをなすつたぢやありませんか。』

『眼鏡は置忘れても萬年筆を置忘れるものか。電車の切符を出す時に、ちやんと此ポツケツトにあつたもの。馬鹿を見た。』

『眞正に機械體操なんかなさらなければよかつたのにねえ。私一寸風呂場へ行つて見て來て上げませうか？』

と私は氣の毒になつて慰めて上げた。兄さんは全く公園で落したものと確信してゐなさる。好い鹽梅です。机の上に置忘れてあつたのを私が拜借してゐるのに、僕は置忘れなんかしないつて嘘を吐いて威張つてゐらつしやる。全く東益さんの仰有つた通り、兄さんは自信家です。

未だ御存知ないけれど、兄さんは二圓八十錢の散歩もしてゐなさる。私先日お隣りの次郎さんと釣魚に行く時、兄さんのゴム靴を拜借して蚯蚓を入れたのですが、つい忘れて來て了つた。眞正に惡い事は出來ないもので、それからはお天氣

が曇ると心配でならない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

姉さんぢやないけれど、斯う見えても私にだつて種々と苦勞があります。第一私が男の子だつたら什麼に宜からうと思ふ。女の子でもせめて姉さんぐらゐの年だといゝのだけれど――姉さんは何時まで起きてゐても叱られない。八時半になると宛然汽車でも出るやうに子供を床の中へ押込む兩親は無制だと思ふ。それから皆が煩いのおしやべりだのと言はずに、私の訊く事を一々敎へてくれゝばいゝと思ふ。

『兄さん〳〵、日外姉さんと酉の市の賣殘りで十九世紀以來持ち越しの老孃だつてお話してゐらつしやつたのは此お方の事でせう？』

と私が言つたら、姉さんは、

『お默りなさい、失禮な！』

と仰有つて白い目をなすつた。だつて私が客間の隅の方でお人形さんを持つて遊んでゐたら、靜子さんが姉さんの許へお遊びにお出なすつたものだから、私不覺大きな聲を出して訊いて見たのだわ。すると靜子さんは來たと思ふと直ぐに歸つて行つたが、其後で姉さんは轉げて笑ひ出した。兄さんは突然私のお人形さんを引奪つて投り出した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

五月雨やなんて兄さんは仰有るが、實際入梅は厭なものです。今日も雨ふりだつたので、私は晝からおばあさんのお室へ行つた。おばあさんのお室は階段を上つて最近にある。

『此梯子段は厭に曲りくねつてゐるから氣をつけないと頭を破りますぞ。危い〳〵、

さあおばあさんに確乎と捉つて。』

等とおばあさんが私に捉つてヨボ〳〵なさる。何方が危いんだか分りやしない。

おばあさんは私を甘やかす。これが子供の爲めに何よりか惡いのですつてね。可愛がるもいゝが、那麼犬つころ可愛がりぢや何にもならぬとお父さんは始終言つてゐなさる。お母さんが私を叱る時に、おばあさんは可愛想にといつてカステラを下さるのです。カステラを下さるのが惡いなら、先日お嬢さんにといつてマシマロを持つて來た人は大惡人といはなければなりません。其は兎に角として、私達は種々のお話をしました。

おぢいさんは何で死んだの？　おばあさんはおぢいさんと喧嘩なすつた事がありましたか？　お父さんとお母さんは時々喧嘩してよ。おばあさんは何故齒が皆抜けて了つたの？　一寸其眼鏡を拜借しても宜うムいますか？　おばあさん〳〵、おばあさんのお顏は如何して那麼に皺が寄つたの？　年が寄て嬉しいの？　一寸

引出の中を拜見して宜うムいますか？　未だ這麼ドロップが何處かに仕舞つてあるの？　おばあさんは眞正に善い子ねえ、けれども無暗に下女や下男の事に口を出すから困るつてお母さんか仰有つてゐてよ。年を取つて愚に返つてゐなさるの？　さはらぬ神に祟りなしつて一體何の事でせう？　等と時間があつたら、もつと訊く所だつたけれど、丁度其時に夕飯の鈴が鳴つた。で、私が直ぐにお室から駈け出すと、おばあさんは、

『氣をおつけよ〳〵、此梯子段は厭に曲りくねつてゐるから、落ちると頭が……』と言ひかけて、忽ち蛇にでも嚙まれたやうな悲鳴り聲を立てなすつた。其時には最早私は大音を立てゝ梯子段を轉げ落ち、身動きも出來ずに倒れてゐたのです。

『早く誰か來ておくれ。お龜が落ちたよ。これだから私が言はない事ぢやない——此梯子段は厭に曲りくねつてゐるから落ちると頭が……』

頭は唯一個しかないのだから、然う幾度も仰有らなくたつて宜かりさうに。

お父さんもお母さんも由良之助のやうに駈けつけた。すると何誰だか――人の悪い――手を拍いて笑つたものがあつた。實は其が眞正の私で、私は手すりの蔭に匿れてゐたから、些とも怪我なんかしやしない。兄さんは私の着物を着たお父さんのステッキを抱上げて、喰つきさうなお顏をなすつた。

おばあさんは少しも御飯がいけなかつた。餘り喫驚なすつて、動悸が昂ぶつて仕樣がないと仰有つた。無論皆は私を叱つた――何時でも然うです――唯眞の遊戯にしたばかりだのに。おばあさんはお藥を召上つて直ぐにお休みになつた。

お父さんはお前はおてんばでいけないと仰有る爲めに私を書齋に連れて行きなすつた。私は餘り口惜しかつたから、

『それならお父さんはステッキが落ちたのと私が落ちたのと何方が宜のですか？』

と訊いてやつた。

『其は無論ステッキの方がいゝさ。』

とお父さんは答へた。それ御覽なさい。

『では那麼に仰有らないでもいゝぢやありませんか？　其とも今度はステッキの代りに私が落ちればいゝと思つていらつしやるのですか？』

と念の爲めに又訊いて見た。全く大人だの狂人なんてものは什麼考へをしてゐるか知れやしない。けれどもお父さんは理の當然に責められたと見えて、唯笑つてゐなすつたから、私も奈良の堪忍駿河の堪忍と思つて、胸を擦つて仲直りをして了つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今日は惡い事が澤山あつた。お母さんは私を避暑につれて行かないと仰有る。姉さんは私と口を利かない。兄さんは私が恐ろしくなつたといふ。お父さんは最

早呆れて物も言へぬと仰有りながら、一時間以上もお小言を仰有つた。

兄さんが一昨日の晩おそく雪子さん許から歸つて來た時に、私の室に未だ燈火がついてゐるから、龜子は未だ起きてゐるのかと思つて覗いて見ると、私がお人形さんを枕にして倒れてゐたさうです。呼べど起せど正體がないから、兄さんも喫驚して、お母さんを呼び、お父さんを呼び、お醫者さんまで呼んで大騒ぎをしたさうです。

だつてまあ驚くぢやありませんか、お母さんのモルヒネ丸藥が三粒足りなくなつてゐたのですもの、と姉さんが仰有つた。兄さんはお醫者さんが私のお腹へポンプを入れて井戸替をしたと仰有つたが、まさか！　きつと又例のちやらつぽこでせうよ。其は兎に角氣のついた時には宛然園遊會へでも行つてゐるやうに種々のお顔が見えました。さうして皆で私を取卷いて、無暗にコーヒを飲め〳〵つて仰有るのですもの。けれど私は眠くて〳〵誰と誰がゐなすつたか能く覺えません。

『奥さん、最早此方のものです。大丈夫ですから御安心なさい。』といふお醫者さんの聲が聞えた時、私はお人形さんが病氣で先刻お藥を飲ませた事を思出し、でもはお醫者さんがお人形さんを診察に來て下すつたのだらうと思當りました。けれども眠くて仕方がなかつたから訊いても見ず、朝御飯の積りで目を覺ました時には、最早お晝でした。別にお腹も空かず、頭が妙に重い。お母さんは青白いお顔をして、お父さんは六ケ敷いお顔をして、兄さんは結局葬式がなくて殘念だといふやうなお顔してゐなすつた。

『一體何方が御病氣なのですか？』

と私は訊いて見たら、兄さんは、

『おれが病氣だ。おてんば龜の兄さん炎といふ厄介な病氣だ。』

とお答へになつた。姉さんも眞似をして、

『私も龜子さんの姉さんカタルよ。それも慢性で始終難澁の爲通しですわ。』

と仰有つた。尙ほ兄さんは私の貯金を引出してお醫者さんに拂ふから其積りでゐろと仰有つた。同じ孫でも彼の子は本當に可愛氣のない子だよ。おばあさん丈けは水天宮樣の御利益は恐ろしいものだと言つて、自分のお友達か何ぞが大手柄でもしたやうに勝誇つてゐなすつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

けれども姉さんの火のやうになつて憤つたのは、私が油繪のお稽古を思ひ立つたからです。油繪が大流行です。姉さんのお友達で油繪か水彩畫をかゝぬ人はありません。何にでも不吉をつける兄さんさへ、繪畫の分らぬものに詩歌の分らう筈がない。更に詩歌の分らぬものに人生の分らう筈がない。此故に輓近洋畫の勃興及び日本畫の復興は共に或意味に於て慶賀すべき一現象であると、又現象を極め込んでゐなさる。其は然うとして、姉さんは架畫とパレットとそれから種々の

繪の具の入つた可愛い錫の管を澤山持つてゐなさる。私は其が可愛くて〳〵仕樣がないのだけれど、姉さんはついぞ觸らせもしません。

お晝過に私は寢てゐたけれど姉さんが客間へ入つて唱歌のお稽古をしてゐなさる樣子だから、少し考へがあつて起上りました。私の腕を試すには再とない好機會です。で、私は窃と姉さんのお室へ入り込み、例の錫の管を押し潰して、赤青バイオレット白黑インヂゴー紫レーキ等と有らゆる色をパレットの上に列べました。丁度其時に玄關の鈴が鳴つたから、何誰が來なすつたかと思つて、一寸階段から覗いて見たけれど分りません。ところへお菊が上つて來たから、何方と訊くと、よし江さんですといふ返辭。よし江さんなら先達て御婚禮なすつたばかりですから、丸髷に結つて來たか、それとも矢張り束髮でいらしつたらうかと、急に其が見たくなつて、私は直ぐ其足で客間へ下りて行きました。

姉さんとよし江さんはどうもお暑くなりました、つい〳〵御無沙汰ばかり申上

げて眞正に失禮でムいました等とお互に口眞似をして謝罪ごつこをしてゐなさる。成程姉さんが彼の人は耻かしがり屋だからと仰有つた通り、丸髷には結つてゐませんでと見ると私はパレットを提げてゐたのに氣がつき、姉さんに見つかつては大變と思つて、よし江さんの後方の可成姉さんから遠い椅子の上に載せるより早く、私は稲妻のやうに窓掛の後方へ匿れた。二人は漸くお辭儀のお稽古を終つて、姉さんはさあ何卒お掛け下さいとよし江さんに椅子を薦めたが、よし江さんはどういふ料簡か、お舍しなさればいゝのに其椅子は謙遜して、まあ有らう事か有るまい事か、撰りに撰つて、さながら奇蹟のやうに、私のパレットの上に坐つて了つた。さあ大變な事になつたと思つて、私は木の葉のやうに慄へてゐました。

私はどうも氣の毒で〳〵溜らなかつた。けれどもよし江さんは人の心も知らずにパレットに乗つて、旦那樣は毎朝九時の御出勤で、お義母さんはリウマチスが

御持病で、思つたよりも物の分つた人で安心した事から、其外には下女が一人と猫が一疋ゐるばかり、下女は埼玉縣のものださうで、お湯に行く事を湯さ行かざあと申します等と仰有つて嬉しがつてゐなさる。やがて尙二三軒廻らなければならないからと、よし江さんは姉さんの止めるのも聞かずに立上つた。給の具は執念深くパレットぐるみお尻についてゐる。惡くするとパレットを背負つて歸るかも知れない。

『では又御ゆるりと、旦那樣に宜敷』等と姉さんはまゝごとの眞似をして、よし江さんを送り出さうとしたが、忽ちパレットに氣がついて、それから大騷ぎを始め、結局よし江さんは姉さんの着物を借りて、泣きさうにしてお歸りになつた。私は姉さんに頭の毛を引張られた。お父さんはお謠曲が濟んでからお仕置をするから待つてゐなさいと仰有つた。困つた事に此頃はおばあさんまで向ふ組になつて了つたから、もう謝つて戴く譯に參りません。私眞正におばあさんのお寢床へ

蝦蟇蛙なんか入れなければ宜かつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

兄さんは私は大變に善い子だけれど、今の分で行くと什麼おしやべりになるかも知れないから、其が案じられると仰有つた。のみならず是からは可成口を利かぬやうにするがいゝと御忠告くだすつた。おばあさんは私の事を彼でも猫より益だと仰有つてゐなさる。全く先日なんか若し私が默つてゐたら、屠屋がお父さんの靴を攫つて行つたに相違ない。けれども私が默つてゐていゝものか惡いものか、今日から一週間試して見ませうよと私は兄さんと約束して了つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

お晝過にお母さんは着替をなすつて私の室へ一寸お寄りになつた。

『龜子や、私はこれから姉さんと買物に行つて來ますから、音なしくお留守居をするのですよ。それからお菊に整然としてゐるやうに言つておくれ、何方がお出になつてもお取次の出來るやうに。』

私はお菊に然う言ひつけに行つたけれど、無論口を利かない積りだから、何とも言はなかつた。私はお菊の室が好きで、長い間遊んでゐた。其中にお菊は髪を梳き始めた。すると玄關の鈴が鳴つた。

『龜子さん一寸行つて頂戴。』

と此お菊女は惡い癖で、姉さんの事をお嬢さんと言ひながら、私の事は龜子さん〳〵で通す。私は相變らず默つてゐてやつたが、

『ねえ、お嬢さん、後生だから、一寸行つて頂戴。』

とお菊は肌脱の儘頭を押へて泣きさうになつたから、私が出て行つた。品の善い奥さんが名刺入を持つて立つてゐなさる。お母さんはお在宅ですかとお尋ねにな

つたから、私は手眞似をしてお母さんと姉さんのお留守な事を知らせて上げた。すると先方でも何か手眞似をしながら、私に名刺を渡して、尙ほシゲ〳〵と私の顏を眺めて、『お幾歳だらう、お可愛さうに、這麼好い御容色をして！』と仰有つた。其名刺によれば此方はつい先頃近所へ越して來た黑岩さんといふ辯護士の奧さんでした。

それから私は又お菊の室へ戻つて、クリスマス・カードを一枚貰ひ、其に『私は啞で聾です』と書いて、胸へかけた。次に來たのは支那人の反物賣だつたから構ひません。私は唯首を振つて見せた。其次に鈴が鳴つた時にはお菊が出て行つた。何人かと思つたら、今度はお友達の富士子さんがお遊びに來たのでした。

私は鉛筆と紙を持つて來て、口を利くなと言はれたから、少くとも一週間皆が什麼に困るかと思つて試めしてゐる最中だと書いて見せた。すると富士子さんも鉛筆を取つて、大人といふものは何の恨があつて那麼に子供を虐待するのでせう

か？　私だつて那麼失禮な事を言はれたら誰が口を利いて上げるものですかと大に同情してくれた。そこで私はお人形さんを持つて來、お菊がお菓子を出してくれて、私達は飯事を始めましたが、どうも一々思ふ事を紙へ書くのはナカ〳〵面倒なものです。其中に雨降りの所だといつて、富士子さんが蝙蝠傘を翳した迄は上出來だつたが、花瓶を粉破しちやいけませんよとお斷りを書かない中に、蝙蝠傘が花瓶に觸つたものだから、高麗燒は落ちて碎けて了つた。富士子さんは直ぐに歸つて行つたからお母さんに叱られないけれど、お菊は私達を亂暴なおてんば娘だと言つた。それで私は今度は姉さんのお室へ行つて、大人の眞似をして音なしく晩方まで一人で遊んだ。けれども姉さんの歸つたのを知らずにゐて、私は耳の處を打たれた。室中ジョッキー・クラブの香がするといつて。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

例に依つて夕御飯の時は賑かだつた。種々とお話のあつた末、お母さんは眞面目腐つて、姉さんに向ひ、

『ねえ、春子、彼の黒岩の奥さんといふお方は餘つ程妙な事を言ふ人だねえ。』

『眞正に可笑しな方ねえ。』

『黒岩つて彼處の辯護士でせう？　今日お留守中に來たやうでしたよ。』

と兄さんの話の中へ割込んだ。

『彼處の奥さんさ。今日東さんのお宅で一寸お目にかゝつたのだよ。何でも龜子がお可愛想でならないつて、頻りに氣の毒がつて、其かち未だ學校へはお通でになりませんかとお訊きぢやないか。どうも彼通りの奴で未だ學校どころぢやムいませんと答へると、又氣の毒がつて、幸ひ黒岩の兄の妻の何とかに當る人が盲啞學校へ奉職してゐるから、出來る丈け御便宜を圖らせるやう、黒岩から紹介致させませうなんて、自分一人で呑込んでゐなさる。眞正に可笑しな人もあればあつたものさ。龜子を片輪者か何ぞのやうに思つてゐなさるらしい。』

と仰有つて、お母さんは私の方へお向きになつた。私は兄さんに事の次第を說明させやうと思つて、目語したけれど、兄さんは唯笑つてばかりゐたものだから、お母さんは又私が何かいたづらをしたと思つて了つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

久しぶりで常子さんが赤さんをつれてお遊びに來た。常子さんは函館の叔父さんの娘で、姉さんより一つ年長です。兄弟は他人の始まりといつて、從兄弟になると自然馴染が薄くなるのだらうけれど、私といふものゝ歷乎としてゐるからは暑い寒いの音沙汰ぐらゐはしても宜かりさうなものだ——勘太の奴も勘太の奴で年に一度年始狀を寄越すばかりで、とおばあさんは叔父さんには大分倒されてゐるさうで御機嫌が悪い。けれど可愛い赤ちやんよ！　私は抱つこして上げたくて

〳〵仕方がなかつたけれど、姉さんは落すと大變ですと瀬戸物見たいな事を言つて、御自分の手柄のやうにしてゐなさる。眞正に公徳心がないわ。

『姉さん〳〵、此赤さんは何故這麼に長い着物を着てゐなさるの？』

『然うねえ。』

と姉さんは困つた。『婦人世界』には那麼理由は書いてないと見える。

『成程面白い質問だ。ヂエロム・ケイ・ヂエロムも那麼事を言つてゐる。恐らくは何人も此問題に十分滿足の解決を與へる事は困難だらう。』

と兄さんは又學者ぶつて六ケ敷くして了つた。

『姉さん〳〵、何故此赤さんは這麼赤いお召を着てゐなさるの？　矢つ張り山王のお猿さんのやうに赤いおべゝが大お好きなの？』

すると兄さんは、

『古來吸取紙と赤ん坊の着物は赤いのが正則のやうだね。』

と言つて常子さんを笑はせた。

『姉さん〳〵、常子さんの旦那樣は少し聾だと仰有つたけれど、此赤さんも聾でせうか？』

今度は何人も默つてゐたが、姉さんは窃と私のお尻を抓つた。非道いわ！　猫の子は矢つ張り猫だから、聾の子は矢つ張り聾だらうと思つて訊いたのに。

ところへ東益さんが見えたので、姉さんは一寸失禮して鉛筆のお稽古におかゝりになつた。兄さんも今夜は雪子さんに獨逸語を教へる約束がないとかあるとかで、これも大に失禮して、靴の中に金魚がゐたとかゐなかつたとか言つて憤つて出て行きなすつた。どうも獨逸語が流行る。獨逸語が御婚禮になつて、御婚禮が赤さんになる頃は、私もおてんば娘つて言はれないやうになるかも知れない。私は赤ちやんを抱つ子して長い間遊んだ。

『私は幾歳位になれば赤さんが生れるでせう？』

と訊いたら、常子さんは唯笑つてゐなすつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『龜子さん、龜子さん、龜子さんは東益さんが好きですか？』

と姉さんが御自分の事を私に訊いた。

『私、東益さん大好きよ。兄さんよりも尙好きよ。』

と私は自分の事と姉さんの事を一緒にして答へた。

『お母さんが東益さんの事を何とか仰有つてゐやしなかつたの？』

と姉さんは又何氣なくお尋ねになつた。

『仰有つてゐましたよ、先日、おばあさんとお二人で。』

と是は事實正直の所です。

『何と仰有つて〻？』

『眞正に空竹を割つたやうなお氣質で、さつぱりとした善いお方ですつて。それに兄さんとお仲善だから何よりい〻つて。』

『其丈け？　それからおばあさんは何と仰有つたの？』

『おばあさんも彼の方なら氣質も優しいし、身元も分つてゐるから私も安心して目を瞑れるけれど、お春とはよめとうめになりはしないか知らと仰有つてゐてよ。姉さん、よめとうめつて何の事？』

けれども姉さんはよめとうめの說明はなさらずに、

『お父さんは何とか仰有つたでせう？』

と私を興信所か何ぞのやうに思つてゐる。

『お父さんは大きな聲で斯う仰有つてよ。』

『どう？』

『是は西塔のかたはらに住む武藏坊辨慶にて候。我宿願の仔細有つて、五條の

天神へ、丑の時詣を仕り候。今日満參にて……』

すると姉さんは本氣で聽いてゐるのに馬鹿だと仰有つて、私の肩を叩いた。けれど唯調戯にしたばかりで、それから未だ種々のお話をした。さうして私は此頃大層柔なしくなつたから、最早これからは一日に一度ぐらゐしか私の頭の毛を引張りますまいといふ約束をなすつた。

大人つてものは存外智恵のないものです。姉さんをお嫁にやつて、兄さんにお嫁を貰ふ代りに、兄さんと姉さんを御夫婦にすれば一番手が掛らなくていゝ。尤も似たもの夫婦で、繼子ごつこだなんと言つて、無暗と私を苦めちや困るから、那麼事のない約束で、然うするやうにと、私はお母さんに御相談して見たのだけれど、兄弟同志で夫婦になるものは何處の世界にもないと仰有つた。矢張り兄弟の間には兎角我儘があつていけないのか知ら？　けれども可笑いぢやありませんか？　現にお父さんとお母さんは親同志のくせに御夫婦になつていらつしやる。

餘り腑に落ちないから、おばあさんに訊いて見たら、彼は最初から親同志ぢやない、夫婦になつてから親になつたのだと仰有つた。成程大人といふものは馬鹿なやうでも、言ふ事に一理ある。然うして見ると、姉さんは矢つ張り東益さんへ嫁ぐ方がいゝのでせう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

昨夜は草臥れて了つて日記どころでなかつた。次郎さんと釣魚に行く約束で私は大層早く起きて蚯蚓を掘りました。次郎さんは早起が嫌ひだし、其に銀行の方が決算で繁忙を極めてゐるから、蚯蚓を掘つてゐる暇がないと言ふのです。で、私は五時までに餌の用意をする筈でした。尚ほ次郎さんは牛乳を入れる桶へ蚯蚓を土共入れるといゝ、彼は川へ行つてから水を飲む時に便利だからと敎へてくれました。お前は大きな聲を出して魚を驚かしたり、蛙が鳴きもしないのに歸らう

〳〵と言つたりするから、實はお前を連れて行くと先生に叱られるのだけれど、特別に内證で連れて行つて上げる。其代りにお辨當の支度は十分にして來い。龜の子ぢやないが、どうせ晩までかゝるだろ。それにはお母さんの四季袋へ詰め込んで來るか一番だ。殊にビスケットを忘れると擲りつけるぞ。僕は腹がへつて堪らない。と次郎さんは一昨日から餓じがつてゐました。

何時時計が四時を打つかも知れないと思つて、私は碌々眠らずにゐると、如何いふ加減か、四時が鳴らずに五時が鳴つたから、私は地震でも搖つたやうに飛び起きて、着物を着かへました。直ぐに臺所へ行つて、ハムだのワッフルだの玉子だのビスケットだのをごた〳〵と、四季袋に一杯つめました。私は蚯蚓は嫌ひだけれど、魚も次郎さんも蚯蚓でなければ承知しないといふから仕方がない。お庭の土の軟い處を掘返して、桶の中へ三分目ばかり長い奴を入れた時に、牛乳屋の車の音がガラ〳〵と聞えた。私は如何していゝか分らずに、桶を舊の棚へ上げて

樹の影に身を匿した。然うとは知らずに、配達は牛乳を注いで蓋をしたから、やれ安心と思ふ間もなく、お菊か誰かの手が出て、桶は其儘臺所へ入つて了つた。で、仕方なしに私は又一生懸命になつて掘り始めた。萬年筆が折れて了つた。ところへ次郎さんがお隣りの厩から顔を出して、

『龜子さん、もう遲いから早くおし。餌とビスケットは大丈夫だらうね。皆お前持つて行つておくれ。僕は釣竿を持つて行くから。』

そこで私はお母さんの四季袋が重くて困る上に、蚯蚓を前垂に入れて出かけました。垣根を越す時に着物を破つて、私が少し泣くと、次郎さんは眞正に女は仕方がないと仰有つたから、私はお辨當が重くて腕が痛かつたけれど黙つて我慢してゐた。それでも先方へ着いてから、次郎さんは能く餌をこぼさなかつたと褒めてくれた。先づ〳〵兵糧をと御飯を喰べましたが、次郎さんはナカ〳〵親切で、ハムを一片とビスケットを五個くれて、此ワッフルを一口嚙んでもいゝと仰有つ

た。桶は持つて來られなかつたと言つたら、次郎さんは其なら其夏帽子を借せと言つて、私の夏帽子で水を飲んだ。それから私は蚯蚓を切つて釣針につけて上げた。すると次郎さんは急に意地が悪くなつて、私に口を利かせません。咳ばらひをしても睨みつける。一時間も二時間も然うでした。

忙しい程釣れるといつたのに、何故斯う魚が餌につかないのだらうか、私は蚯蚓のお代りをする度に、訊きたくて死にさうだつたけれど、舌を嚙んでゐなければならなかつた。それから蛇が私の足の上を通つた時に、私は覺えず聲を立てますと、次郎さんは釣竿を投り出して、私の頭を打つた。

『駄目だ〳〵、女のゐる處で釣魚をしても駄目だ。お前なんか連れて來ないと可かつた。河へ落ちても知らないよ。』

と私を突き飛ばしさうにして、針を取られたのまで私の所爲にして了つた。

河を下りて水車の處へ來ると、ボートがあつた。けれど其處まで行くには丸木

橋を渡らなければなりません。私はえるだらうと思つたら、果して辷つて、落ちて着物を濡らした。するとおつこちるのを待つてゐた次郎さんは、すべつて轉んで等と種々の事を言つて笑びました。けれども私は涙一滴も出さなかつたから、赤ん坊だつて言へなくて口惜しいでせう、と訊いたら、感心だね、お前は能く人の肚の中が分るといつて次郎さんは私の頭の毛を引張つた。さうして自分ばかりボートに乘つて、私は乘せてくれないから、

『私も一緒に連れてつて！』

と呼びますと、

『お前が來ると邪魔になる！』

と丁度お寺の〳〵馬鹿坊主のやうな事を言つて、一人でヅン〳〵下の方へ漕いで行つて了つた。私は餘り腹が立つたから、其儘一人で歸つて來ました。

家へ着いた時にはお書でした。御夫婦づれのお客樣が見えてゐなすつた。お母

さんのお友達です。奥さんは一寸した絹張りのハイカラでしたが、旦那様は濱のお奉行さんに洋服を着せたやうにお色が眞黑い。此お方のお出になる事は昨夜お母さんがお話があつたので、私は今朝新しい着物を着たのです。私が入つて行くと、家の人もお客様も言ひ合せたやうに私の顔を見世物のやうに見ました。お母さんは好いお年をしてお顔を赤らめなすつた。姉さんは眉を八の字になすつた。兄さんは目で物を仰有つた。奥さんは笑ひかけて咳をして、

『是が評判の龜子さんですか？』

と何處までも私を見せ物だと思つてゐる。

『何處へ行つて來た？　釣魚に行つたのだらう。何を釣つて來た？』

とお父さんは別に憤つたやうでもなかつた。

『駄目ですよ。龜子は餌を忘れて行きましたから。』

と兄さんが仰有つた。

『早くお二階へ行つて着物を着替へてお來なさい。』

と仰有つてお母さんは呼鈴を押した。私はお腹が空いて堪らない。食卓の上には可愛らしいものばかり列べてあるのですもの。けれども顔を洗つて着物を着替へなければなりませんから、お菊が來た時には私は極く從順に跟いて行きました。

『龜子さん、あなたは今度こそお藏へ入れられてよ！　お母さんは大變な御立腹よ！　お松は龜子さんがお在宅ぢや到底も御料理番の役は勤まりませんて、お母さんに言ひつけてゐましたよ。あなたは何故お母さんの折角お蒔きになつた草花の種を掘りかへしたり、着物を這麼にしたり、其帽子はまあ如何なすつたのです？　さうして那麼にまあ日に燒けて！』

とお菊まで私を叱る氣でゐる。

御飯が濟んでから、お菊は私の顔へクリームを塗つてくれた。私は海鼠のやうに疲れて、二度と再び釣魚になんか行くよりも病氣になつた方が餘つ程樂だと思

ひながら眠つて了ひました。目を覺した時には夕方だつたけれど、お客樣は未だ歸らない。私は客間へ行つてお相手をした。

奥さんは私の歳を訊いたり、お歳の割に身體が大きいなんで反物見たいな事を言つて褒めたりした。私の方でも種々の事を訊いた。

『あなたのお家何處？』

『日本橋。』

と電車の車掌のやうに仰有る。

『日本橋なら下町ですねえ。』

と私は下町を少し激しく言つた。

『然うです。けれど電車でお來になると一時間位ですから、時々お遊びにいらつしやい。』

『私いやよ。私、下町の人は押しが強いつていふから厭よ。此方から一度行くと

好い氣になつて三度も來るつて、お母さんが仰有つてゐてよ。』

ところへお母さんが離座敷で仕度が出來ましたから、何にもムいませんけれど、と御案内にお出になつた。けれども奥さんは、馬鹿と子供は正直なものだとか仰有つて、お奉行さんを引つ張つて歸つて行つて了つた。

『龜子さん、お前又何か餘計なおしやべりをしたね？』

とお母さんがお尋ねになつた。私は、

『いゝえ。』

と答へたけれど、何だか氣の毒でならなかつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今日は巡査さんが來た。戸籍しらべかと思つたら、然うではなくて、服部仙一に御用有之、明二十六日午前十時當署へ出頭すべしといふ呼出狀を姉さんに渡し

た。姉さんが驚いて頻りに謝つたものだから、巡査さんは、何、大した事ぢやありませんから御心配は要らないと言つて氣の毒がつた。私も吃驚しておばあさんの許へ注進けに行くと、おばあさんも仰天して、どれ私が行つてお謝罪を言つて上げやう、とんとことんのとん、と立上つたけれど、最早巡査さんは歸つたと見えて、姉さんが如何したらいゝでせうと青い顔をして上つて來なすつた。

兄さんが學校から歸ると、大心配してゐたお母さんは、お前は一體何をしたの？　警察から呼出しなぞ受けてとおばあさんも姉さんも私もお菊も、阿彌陀池の龜のやうに兄さんの許へ集つた。けれども兄さんは毛頭那麼覺えはない。何かの間違だらうから打棄つて置くが可いと仰有つて平氣でゐなすつた。

晩になつて例の通りに東益さんがやつて來た。兄さんは今日の呼出狀を見せて實に人を馬鹿にしてゐるぢやあないかと憤慨なすつた。すると東益さんは笑ひ出した。

『君、是は違警罪だよ。僕は大に失敬した。しかし番地を違へて置いたから、正歟やつて來やしないと思つてゐた。』

と言つて又笑つた。

『番地を違へたつて、一體何人が番地を違へたんだい？』

と兄さんは未だ腑に落ちない。

『實は僕が先日の晩、明治學院の傍へ小便をして巡査に捉つたのだ。』

と東益さんは白狀して了つた。

『さうして僕の名にして置いたのか？』

と兄さんが怖い顔をなすつた。

『一言すればまあ然うだ。眞に濟まない。が、まあ、聞いてくれ給へ。五六日前の晩だつたよ、僕は白金を散歩して彼の學校の横へ來ると、急に小便が出たくなつたと思ひ給へ。』

『勘辨して然う思つてやらう。』

『幸ひ人通りがないと思つて用を足してゐると、倏忽として横合から巡査が出て來たから、僕は頻りに謝つたあね。一體彼處は人通りの少い處だけれど、惡い時には惡いものさ。學院の生徒が、ベースボールからでも歸つたのだらう、ラ、レラ、リをやりながら通りかゝつて、僕と巡査を取卷いて了つた。しかし査公も僕のフロック・コートに敬意を表したと見えて、餘り叱りもしなかつた。』

『フロックなんか着て、元來何處へ行つたのか？』

『何處へ行くものか。丁度出來て服屋が持つて來たから、着て散歩して見た所さ。査公め兎に角御姓名を承はらうと言ふから、東益條治ぢや却つて疑はれるだらうと思つて、つい君の名を言つて了つた。次手だから年齢まで君のを借用して置いたが、番地を違へて置いたから、まさか來やしないと思つてゐた。』

と東益さんは巡査の來たのを感心してゐる。

『番地を違へたつて、此町内で服部は僕の家だけだから直ぐに分るさ。どうも亂暴だ。科料を五錢取られるぜ。』

『今度は上つたさうだから、五十錢位取られるだらう。』

姉さんはお腹を抱へて笑つた。兄さんは、

『兎に角フロックの立小便は振つてゐる。』

と小便の代作をされて喜んでゐなさる。

『一體彼の巡査は不都合な奴だ。巡査なら巡査らしく、ちやんと角燈を提げて來るが宜いぢやないか。然うすれば此方でも豫め警戒するから那麼間違は起らない。無張灯で現はれたんだから、非は先方にある。實は詰問して大に遣り込めてやらうと思つたが、前にも言つた通り學院の生徒が群つて來たし、那麼斗筲の輩を相手にするのも大人氣ないと氣がついて、勘辨して置いてやつたのさ。』

と東益さんに影辨慶を仰有つた。

結局東益さんが明日學校を休んで、本人が代人になつて警察へ出願する事になつた。

『君、又フロックを着て行くんだぜ。』

と兄さんが冷かしたものだから、皆々又大笑ひだつた。其や是やで笑つてばかりゐて、東益さんは鉛筆を教へないでお歸りになつた。例に依つて姉さんは御門まで送つて行つた。今夜は、

『あなた、又往來へ立小便なんかなすつちや厭ですよ。』

と仰有つて手を握つたか如何か、私は氷を喰べてゐたので、其處までは突止めなかつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

先日次郎さんが御相談に來た。内で親の脛ばかり囓つてゐても一向面白くない

から一つ事業を起さうと思ふと仰有るから、どうするのですと訊くと、今度のお祭にはアイスクリーム屋を開店して一儲けしたい。就いては道具から材料一式で餘程資本がかゝるから、お前の貯金を少し融通してくれ、其で足りなければ銀行から一萬圓ばかり引出して、其でも足りなければ臺灣の地所を抵當に入れやうと思つてゐると仰有つた。私は四圓五十錢銀行に預けてあるけれど、昨日お人形さんが身投をして了つたので、又一人買はなければならないから、二圓丈けでよければ御用立てゝ上げやうか、一體期限は何時までゞすかと訊くと、お祭が濟み次第返す、お互の間だから利子はつけない代りに、アイスクリームは何杯でも飲ませて上げる、全く彼は飲める商買だから有望だと酒呑のやうな事を仰有つた。

ところが今朝又次郎さんが汚い風體をしてお出になつた。どうなすつたのと訊くと、アイスクリーム屋は少し都合が惡くて中止にした代りに、昨日から宿なしの眞似をしてゐる。どうも彼方此方で犬に吠えられて怖い。それに昨日から一口

も喰べないから、お腹が空いて堪らないと仰有つた。全く昨夜から次郎さんは眞正に來てはゐなさらぬかとお隣から「臺灣島の土族共」が度々訊きに來る。

私はお隣りの人に見られては悪いと思つて、次郎さんを物置へ連れて行つた。次郎さんは今家へ歸るとお父さんからお仕置をされるけれども、お祭の頃まで斯うしてゐて歸ると、日曜學校で習つた放蕩息子が歸つて來たやうに、行方不明の怜が戻つたといつて喜ぶに定つてゐる——どうも此頃はお父さんの御機嫌が悪くて困る、ところでお腹が空いて仕方がないから、ワッフルでもビスケットでも宜いから持つて來ておくれと仰有つた。私はパンとバタを持つて來て上げると、次郎さんは喰べた殘りを懐へ入れて、未だ何か欲しさうにしてゐるから、水を一杯上げやうかと言ふと、水は溝の水を飲むから構はないが、どうも犬が恐くて仕方がないからピストルが欲しい。お父さんのが家にあるけれど取りに行けば捉つて了ふと仰有つた。私は兄さんのピストルぢや悪るからうかと訊くと、結構だと言

ふから、早速持つて來て上げた。すると次郎さんは是で願つたり叶つたりだが、家へ知れると困るから、此事を何人にも話さないやうに僕と指切りをしておくれといふから、私は指切りをして上げた。けれど何人か立聞をしてゐたと見えて、次郎さんは先刻捉つて、お藏の中へ入れられて了つた。何でも彼のピストルで郵便屋さんの脚を打つたとかで、お隣りへ巡査さんが來て八釜しい事をいつてゐた。其爲めに先頃から御病氣の奥さんが大層お悪くなつたつて、今お隣りの女中さんが來てお松と話してゐた。旦那樣が御道樂をなさる上に、坊ちやんが彼ぢや奥さんも眞正に御大抵ぢやムいますまい。

『若し奥さんが失くなつたら、私は何を措いても御葬式に參りますつて、然う仰有つて下さいな。私未だ一遍もお葬式に行つた事がないんですもの。』

と言つたら、お隣りの女中さんは頤を長くした。

* * *

* * *

幽靈つてものは眞正にあるのか知ら？　お菊でもお松でも有ると言ふけれど、田舍者の言ふ事だから信據にはならない。ところが昨日姉さんのお友達が三人お遊びにお來になつて女學校の寄宿舍へ幽靈が出始めたと仰有つた。どんな幽靈つて訊くと、男の幽靈ですと仰有つて大笑ひをなすつた。それから種々と幽靈のお話が始つた所へ兄さんがお歸りになつて、幽靈の形體に關する一場の御講話をなすつた。

『幽靈其物が果して實在するか否かといふ問題は別と致しまして、洋の東西を問はず、時の古今を論ぜず、幽靈化物妖怪變化等の文字の存在は皆さん御承知の事實であります。以上四熟語の內容を檢めて見ますと、怖い凄い恐ろしいといふ共通の點はムいますが、幽靈には人情の分子が最も多く含まれて居ります。化物には聊か滑稽の越味がムいます。若し夫れ妖怪や變化に至りましては唯凄い一方で、強いて申せば意志といふ分子が遺憾なく發揮されて居ります。實例

を擧げて申しますと、皿屋敷のお菊や四谷怪談のお岩は幽靈であります。一つ目小僧や文福茶釜は化物であります。從の渡邊の綱の許へ腕を取返しに參つたのは妖怪變化でムいます。お菊でも老ハムレットでも浮ばれないから、即ち諦められないから出たので、如何にも人の情性に訴へます。代官に化けて瓜喰ふ狐かなは滑稽ぢやありませんか。最高き山の頂きに基督を伴うて、萬邦の榮華を目のあたりに現はし、平伏して我を拜せよ、然らば此諸々の王國は汝のものなる可しと誘惑したるサタンは大なる意志である。即ち光に對する暗、善に抗する惡の意志——靈肉衝突の煩悶であります。

さてダン〳〵とお話が岐路に入つて、說教のやうになりましたが、私はこれから日本畫に現はれたる幽靈の形體に就いて聊か卑見を述べたいと思ひます。日本の繪畫に現はれたる幽靈は取りも直さず大和民族の幽靈の概念であります。例へば子供を驚かすにしても、お化けえと言つて、私共は手を斯う胸の邊に吊

下げます。若しお化けえと言つて、斯う手を上げた日には胃活の廣告見たいで、恐い所が無くなるやうに思はれる。然うかと云つて斯う膝の上に置いて御覽なさい、庄屋樣のやうで可笑い。で、斯う手を垂れてゐるのは、眞に適所へ適手を置いたものだと思つて、私は東方君子國の幽靈の爲めに窃に慶賀する次第であります。

次に幽靈は申し合せたやうに足がない。足を持たぬ。或者は膝の邊で、或者は腰の邊から消えて居ります。Ghosts and Dharma have proverbially no legs

私は何故に幽靈が斯くの如き形體をして居るか、其を解決して此演壇を下りたいと思ひます。

私は學術上の立場からは幽靈を排斥する一人でありますが、文學者としての見地からは輸出超過同樣大に歡迎す可き理由を見出すのであります。若し幽靈の傳說的存在がなかつたら、沙翁全集はハムレットを缺かない迄も、今日傳つ

てゐる其とは大に趣を異にしたでありませうし、又泉鏡花君の如きも多大の打擊を蒙る一人でありませう。其は兎も角として、イヨ〳〵本題に入りますが、前にも述べました通り、私は學理上幽靈の客觀的存在を否定する一人でありますから、始めて幽靈に筆を染めたる日本の畫家が實物をモデルに用ゐて寫生し、其が傳つて今日の幽靈概念に固定したとは信じません。既に實物が存在しないのでありますから、如何に殿樣の御下命であつても、原始的幽靈畫家は材料に窮したに相違ありません。どうかして物凄い感想を現はしたいものと、百方苦心の結果、先づ散らし髪の夜の女を描いたものと見えます。幽靈を外にして、最も幽靈に近い感想を與へるものは是であります。其の散らし髪の夜の女が時代と共に理想化して、今日の幽靈になつたのであります。前に述べました幽靈の手の置場所が明かに此邊の消息を傳へて居ります。私共は暗い處を歩く場合には必ず身體を縮めます。危險を豫期する時に動物が收縮運動を行ふは

心理學者の證明する所でありまして、上役に叱られて恐縮する等も是から出たものと思ひます。大手を振つて暗黑を歩く向ふ見ずはありません。私共は物に衝突りはしないかと懸念するから、自然斯う肩を狹めて、斯う手探りをします。是が即ち幽靈の姿勢であります。然らば幽靈に足のないのは如何なる次第かといふ御質問が出ませうが、私は散らし髪の夜の女に足はないと答へます。私共は夕涼ながらお地藏樣の緣日へ行つてお友達に行當つた刹那、化石になつたらば如何でせう、其人が下駄を穿いてゐたか、雪駄を穿いてゐたか、乃至は靴を穿いてゐたか、明言する事が出來るでありませうか？　まして況んや五月雨の長廊下等で散らし髪の夜の女にぱつたりと行當つた時、其足元が認識出來るでありませうか？　無論出來ない。其の着物の色合さへ識別するの餘地がありませんから、幽靈は恰も同盟したやうに灰色の夜の衣を纏つて居るのであります。

尙ほ幽靈の傍には柳に蹴鞠のやうに必ず靑い火が燃えて居りますが、彼は如何いふ譯のものでせうといふ疑問が出ると、彼は人魂よといふ說もあれば、いゝえ、雪洞を持つてお手洗に行く所でせうと交ぜつ返すおてんばもあつた。それから兄さんは、人魂並に寶珠の玉に就いて、又おしやべりをなすつたけれど、私は何時までも這麼呑氣な事を書いてはゐられません。おばあさんに買つて戴いたばかりのお人形さんが、蚊に食はれてゐるかも知れないから、早く行つて寢んねさせなくちや。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『次郎さん、あなたは何になるの？』

と私が訊いた。次郎さんは南京豆を潰しながら、

『僕は銀行の頭取になりたいと思つてゐる。お父さんは支配人だけれど、見たま

へ、僕の足の人指指は親指よりも長いだらう、だからお父さんよりか尙一層出世が出來るつて下谷の伯母さんが請合つたから大丈夫だ。けれど頭取になる前に一度巡査にならうと思つてゐる。』

『巡査なんかになつて奈何するの？』

『お父さんと先生を縛つてやるんだ。』

『何故？　そんな事を言つて反對に縛られてよ。』

『なあに大丈夫だ。一人ぢや迚もかなひつ子ないから、其時にや警部を賴んで行く。どうもお父さんは此頃花合をして仕樣がない。御飯時が分らないかつて、お母さんに叱られても、毎晩のやうに夜更しをして歸つて來る。先生の方は博奕は打たない代りに、先日 敎場で僕の南京鼠を取り上げたから泥棒も同じ事だ。』

それからお前ん所の兄さんは何になると訊から、兄さんは子供の時に回向院へ

大相撲を見に行つて、其から當分は相撲取のお弟子にやつてくれお弟子にやつてくれつてお母さんをせびつて、毎日泣いてばつかりゐたさうだけれど、此頃では傑作を書いて大家になる積りでゐなさると答へたら、次郎さんは學校へ行つてゐる癖に傑作も大家も分らない。傑作なんか中止にして、矢つ張り相撲取になればいゝに。英語の先生だからロングマンなんて名が宜からう。けれど些つと瘠せてゐるね。と大層殘念がつた。

『それぢやお前は何になるの？　矢く張りお嫁に行くのかい？』

『お嫁に行くか否か那麼事が今から分るものですか。私、良妻賢母になるんですもの』

次郎さんは又良妻賢母が分らなかつた。實は私も分らないのだけれど、兎に角餘り惡いものぢやなからうと思ふから、矢つ張り良妻賢母になる積りだと言ふと、那麼爲體の分らないものになるよりか、淺草へ行つて玉乘になる方がいゝ。お前

は身が輕くて木登りが上手だから屹度成功するよ、僕も女なら、頭取の方は斷つて玉乘になるのだけれど、と勸めてくれた。私は奈何しやうか知ら。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

兄さんは先頃から冷水浴をお始めになつた。毎朝早く起きて、井手傍へ行つて、頭から水を被る。どうせ又三日坊主だらうが、兎に角善い事を始めたよとお父さんが感心なすつた。ところが今日で最早十日坊主か十一日坊主になるけれど、お罷めにならない。君、冷水浴は大に效果があるぜ。結膜炎に大層いゝやうだから君も始め給へ等と東益さんに勸めてゐた。兄さんは病氣の名は種々と知つてゐらつしやる。

姉さんに訊いたら、彼は雪子さんに勸められたんだと仰有つた。僕は文學士だから『實業の日本』と冷水浴は大嫌ひだ。那麼眞似までして、ヨボ〳〵になつて

から一年や二年生き延びて何になる？　僕は那麼卑怯な人間ぢやないぞと威張つてゐるたお方が、雪子さんの御機嫌といへば水垢離までして取るのか知ら？　不見識な人だと齒痒いやうに思つてゐると、東益さんが、僕も今日から始めたよ、結膜炎にいゝやうだ、と仰有つた。一日ばかりで分るものですか。矢張り姉さんに勸められたのださうです。して見ると男は皆マクベスだ。女に勸められゝば何でもするものと見える。此鹽梅では今に兄さんも勸業債券を買つて、新聞の廣告と睨めつ子を始めるかも知れない。さうして二人で斯麼事を言つてゐた。

『お互に月並になつたねえ。』

『命が惜しくなつたよ。』

『學校時代には傑作さへ出せば肺病になつてもいゝと思つてゐた。』

『僕はせめて五十迄生きたい。』

＊　＊　＊　＊　＊　＊

おばあさんが馬鹿で、私を無暗に甘やかすものだから、私は増長して悪くなるばかりだと姉さんが仰有つたから、私はおばあさんに、おばあさん〳〵、あなたは馬鹿だつて本當ですかと訊いて見た。すると何人が那麼事を言つたえ？　と喰ひつきさうなお顔をなすつたから、姉さんが然う仰有つてよ、と答へますと、お春は自分の頭の上の蠅を追ふが可い、那麼にくまれ口を利くなら、祝言の時に何にも買つて上げないばかりだと仰有つた。私は唯おばあさんの爲めに悪くなるのだらうか否だらうかと思つて訊いたばかりだのに、姉さんはお前は眞正に仕樣のないおしやべりねえと睨みつけた。

けれどもお松は此暑さぢや何でも悪なつて、取つ置きといふ事が出來ないから困るつて、私の事だか何人の事だか、お天氣に托けてゐる。暑い爲めといへば、お隣りの次郎さんに打たれた郵便屋さんはダン〳〵悪くなつて、到頭片足を切つて了つて、次郎さん所のお父さんを訴へるとか何とか言つて、今だに揉めてゐる。

けれども次郎さんのお話では足を切つたつてお父さんが義足を買つてやつたから構はないさうです。義足ならいくら歩いたつて、草臥れつ子ないし、豆の出來る氣遣はないし、合はない靴を穿いても決して痛まないし、それに蚋に食はれても痒くないから、釣魚に行く時に何れ位便利だか知れやしない。彼の郵便屋は餘つ程根性まがりだよと仰有つた。眞正に然うなら姉さんも寧そ義足にして小い靴をお穿きなさればいゝ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

次郎さんが來て、突然に、お前は蜂蜜が好きかいと訊いた。大好きと答へると二十錢出して何程でも蜂蜜の取れる所があるといふから、何處ですと訊くと、何人にも話さぬといふ約束をすれば敎へて上げると仰有つた。で、私が然うお約束すると、次郎さんは小い聲を出して斯う仰有つた。

『僕ん所のお隣りの山本さんの所で蜂蜜を飼つてゐる。箱巣が十二ある。』
『那麼事なら私だつて知つてゐるわ。けれど其が何になるの？　彼處の奥さんは紙屑を二錢賣るのでも自分が立合はなければ承知しないつて、評判の呑喬棒ぢやありませんか？』
『ところが昨日から避暑に行つた。』
『けれど怪り行くと蜂に刺されてよ。』
『お前は矢つ張り子供だなあ。何にも知らない。蜜蜂は刺すもので汽車は衝突するものと思つてゐるのかい？　けれども蜜を取りに行つても刺されない法がある。僕はお父さんの御本で讀んで來た。お前二十錢持つてゐるかい？』
私は今朝おばあさんに二十五錢戴いたと答へると、其は好都合だ、お前が資本を出してくれるなら利益は折半すると仰有つた。で、私は次郎さんにお金やお菓子を貸しちやいけないと斷られてゐるのだけれど、銀貨を渡すと、次郎さんは帶

の間へ仕舞つて、
『ぢや僕はこれから硫黄を買ひに行つて來るよ。又此家の前を通るけれど、お前は見ても見ない貌をしてゐなくちやいけない。硫黄を持つて來た表示に、僕は此ハンカチを斯う振りながら、風邪を引いたやうに、大きな咳ばらひをするから其積りでおゐで。尤も夕方までは重役會議があつて多忙だから、お前は夕御飯が濟んでから、窃つと僕ん家の庭へ來るんだよ。二人で山本さん所の庭へ出られるやうに、僕は先刻生垣へ大い穴を二つ拵へて置いた。』
『蜂に刺されやしないだらうか？』
と私は蜂では懲りてゐるから、又念を押して見たけれど、次郎さんは、
『大丈夫だよ、硫黄を燻すから大丈夫だ。皆逃げるか息が塞つて了ふ。僕はロシヤパンを買つて置くから、お前はお匙を忘れちやいけないよ。』
と鰻を捕へない中に御料理の事を考へてゐる。皆取つて了ふのかと訊くと、

『皆取れば泥棒だ。一箱取る丈けで、後の十一は所有權が山本さんにあるから仕方がない。彼處の蜜蜂は春から僕ん家の庭の花を喰ひ荒したり、僕の頭を十八度も刺してゐるから、一箱は此方のものだ。お前はロシヤパンが喰べられないといけないから、夕御飯は餘り喰べない方がいゝよ。』

と仰有つて、次郎さんは硫黄を買ひに行つた。私はロシヤパンに蜜をつけて喰べるのかと思つたら、喉が鳴つた。兄さんはロシヤパンと論語は近頃の流行だと仰有つてゐる癖に、那麼物を買つちやいけないと仰有る。

私は窓から次郎さんの見張番をしてゐた。次郎さんはハンカチを振り〳〵、外見もしないで家の前を通り越しながら、ヘエンと一聲、お仕事をしてゐる姉さんが飛立つ位、大きな咳ばらひをなすつた。

『又お隣りのいたづらッ子が通るよ。龜子さんは最早那麼子と遊んぢやいけませんよ。』

と姉さんが仰有つた。

『遊ぶもんですか。』

と言つて、私は唱歌のお稽古を始めた。

『龜子は奈何かしたのかい？　ちつとも御飯を喰べないぢやないか。』

と夕御飯の時に兄さんが仰有つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

山本さんのお庭は靜かなものだ。次郎さんは懐中から炭を出して、箱の下で火を起せと仰有るから、私は少時は火吹達磨のやうに一生懸命になつて吹いた。

『ほら、透き通つてゐるだらう、金色をして。彼が皆蜜だよ。』

と言ひながら、次郎さんは十能で火を抄つて、硫黄を燻べて巣の直下へ持つて行つた。

『次郎さん、刺されやしなくて？』
『馬鹿だなあ、お前は？　お前はコロ、ホームを嗅がされて刺せると思ふのかい？』
『然うねえ。』
と答へたが、實は私は怖かつた。
『今に硫黄の煙に醉つて此奴等はねえ、窒息して　……あいた！　あいた！　おいち！　おいち！』
と次郎さんは十能を投り出した。蜜蜂はコロ、ホームどころぢやなく、十二の巣から黒雲のやうに出て來た。私も次郎さんも泣きながら其邊を轉げて歩いた。
それから五日の間といふもの私は目を開く事が出來なかつた。顧は未だ瓢簞のやうに膨れてゐる。今でも耳の傍で蜜蜂がブン〳〵いつてゐるやうな心持がする。次郎さんは今だに生れたての鼠のやうに目を瞑つてゐなさる。瘤だらけの頭

をして杖をつきながら、
『眞正にお父さんの蜜蜂の本は信用出來ない。僕は蜂蜜なんか最早大嫌ひだ。お前は今日から目が開いたつてねえ。僕は尙一週間ぐらゐかゝるつてお醫者さんが言つてゐたよ。』
と垣根越しに仰有つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『英語だつて然うでせう。』
と私の入つて行つた時に、東益さんが姉さんに仰有つた。姉さんと東益さんは机をへだてゝ坐つてゐなさる。夏の夜の電氣燈は殊に明るい。
『マンには男といふ意味と人間といふ意味があるけれど、ウマンには女といふ意味丈けで人間といふ代表的の意味が含まれてゐません。』

机の上には鉛筆の御本がある。

『此故に男女同權なんて事は徒らに主張者の語原學的無學を表白する愚說に過ぎません。聖書を見ても然うぢやありませんか。神は始めて男即ち人間を造つて、其男の肋骨、即ち人間の一部分から女を作つたとあります。で、女は人間の片端でせうが、男は人間の全部なりといつて差支ありません。英語もヒブルウ語も此點の區別が大層明白でいゝ。女はマンから作つたからウマンです。マンとウマンには教授と助教授、艦長と副艦長ぐらゐの逕庭があります。ウの字は丁度助教授の助、副艦長の副の字に當ります。又時間の問題から見ても、男の方が先に生れて來たのだから、世界の先取權は男の手にあるのです。』

と仰有つて、東益さんは笑つた。

『だから私同權なんか唱へちやゐないぢやありませんか。』

と姉さんは口惜しさうに仰有つた。

成程東益さんは語學者丈けあつて豪い事を仰有るけれど、議論と實行には殿樣と家來ぐらゐの逕庭がある。明日は先日仕立てゝ上げた白がすりを着ていらつしやいよと言はれゝば、雨が降つても必ず白がすりを着て鯱構へてお來になる。あなたは髭を立てる方が似合ひますよと言はれると、義經のやうな可愛いお髭を生やして頻りに撚つてゐなさる。休暇には一寸歸省したいけれど、ウマンの御許可が出ないので困つてゐなさる。

* * * * * * * * * * * *

おばあさんは夕御飯になつても下りてお來なさらぬ。お母さんの仰有る所ではおばあさんは斯う目が離せなくては迚も仕方がないから、一年ばかり牛込の叔母さんの所へ行く御決心をなすつたさうです。けれども私眞正に何にも惡い事はしないのよ。

然う聞くと、お父さんは怖いお顔をなすつて、私の方を向いて、

『龜子、お前はおばあさんに何をしたのだ？　又蟾蜍を入れたのか？　白狀おし。』

と私が泥棒でもしたやうに仰有つた。

私何にもする積りぢやなかつたのよ。唯お坊さんがお出なすつた時に、私はおばあさんの手箱から數珠を持ち出して、玉の頸輪にして遊んでゐたら、玉が蝶々か何か見つけて、私が數珠を取らない中に駈け出したのですもの。玉は次郎さん所の厩の屋根へ上つて了つて、いくら呼んでも歸つて來ない。次郎さんが捉へやうとして上つて行つたら、何處かへ逃げて了つた。さうして昨夜私の寢る時分にやつと歸つて來たけれど、最早數珠は失してゐました。

おばあさんは彼の數珠はおばあさんのおばあさんが何とかいふ豪いお坊さんから戴いたのだと言つて、大層大切にしてらるつしやる。おばあさんは何一つ仕舞つて置く事が出來ない、宛然龜子が始終私の手箱の中に入つてゐるやうだと仰有

つて憤つてゐなさる。おばあさんが叔母さんの所へ行つて了ふと、私眞正にお氣の毒だわ——おばあさんの物に手をつけないで音なしくしてゐるやうに、毎日五錢宛戴いたのが戴けなくなつて了ふのですもの。けれど兄さんはおばあさんは尙一層見込のある事に投資なさればいゝのにと笑つてゐなさる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

おばあさんは當分といふ事で、今朝叔母さんのお家へ行きなすつた。私は淋しくて仕樣がないから、富士子さんの所へ出かけて行つた。彼處のお母さんは眞正に可愛氣のない子だよ。

『富士子さん、遊びませう。』

と私が呼んだら、

『富士子さんは唯今お琴のお稽古中ですから又後刻、あなたは火事ごつこなんか

なさるから厭さ。』

とお齒黑をつける時のやうなお顏をなすつた。彼だから旦那樣も惡にや惡いが、お氣の毒だつて皆が言つてゐる。其は然うと琴の音なんか些つともしやしないから、嘘を仰有つたに違ひない。それに私とお約束があるのだから、富士子さんは屹度出て來なさると思つて、往來に立つてゐると、空馬力がガラ〳〵つてやつて來た。

『龜子さん〳〵。』

と行違ひながら呼んだものがあるから、振返つて見ると、次郎さんが馬力に乘つて手招きしてゐた。で、私は直ぐに駈けて行つて乘つた。馬方は私達の乘つてゐるのに氣がつかないと見える。眠いのでせうか、それとも今日の儲けを胸算用してゐたのでせうか、私達が町はづれへ來ても、知らん顏をしてゐる。

少時すると馬方はとある家の前に馬を止めて、其處の井戸の水を飲んだ。其時

は私達の方を見て、笑ひながら、

『おい、何處まで跟いて來る積りだい？　此炎天に歸るのが大變だよ。』

と言つた。さうして針瓶の水を私達に飲ませてくれた。ナカ〳〵話せる奴だと次郎さんが仰有つた。ところへ家の中から男が人が出て來て、馬方と雨が降らなくて困る話を始めた。煙草入と村田の看板のやうな太い鉈豆煙管が車の横に結ひつけてあつた。と見ると次郎さんは車の上を這つて行つて、煙管の中に何か入れて、又這ひながら戻つて來た。

『何を入れたの？』

『火藥だ。』

『あぶない！　私彼の人に教へてやらうや。』

『大丈夫だよ。眞のおまじなひ程入れたばかりだから。一寸驚かしてやらうと思つて。』

馬が些つとも凝つとしてゐないものだから、馬方は間もなく男の人に左様なら、と言つた。馬方は又ガタピシャと動き出した。馬方は煙草を飲む積りで火の用心を取りに來たから、屹度吃驚するだらうと思つて見てゐると、鉈豆を啣へたまゝ、腹掛からマッチを出してパチンと擦つた。すると忽ち鐵砲のやうな音がして、火薬が爆發したから堪らない。馬方は尻餅を搗く、馬は打たれでもしたやうに荒れ出す。さあ大變と思つた丈けで、其から後の事は如何だつたか今だに分らない。

何だか樟腦の香がすると思つて目が覺めたら、私は井戸傍で知らない人達に取卷かれてゐた。水で私の頭を冷したと見えて、髪の毛が濡れてゐた。

『やつと氣がついた。お孃さん聢乎おし。』

『もう大丈夫だ。』

『其は然うと最早追つけ來さうなものだ。彼の子は廣尾だとかいつたつけ。』

『彼の子は運の好い子だよう。眞倒さに落ちたけれど、些つとも怪我をしなかつ

た。』

『八右衛門は目のくり玉が飛出たやうだ。』

『何でも煙草入の中へ火薬を零して氣がつかないでゐたとか言つたが、何てえ麁相な事だらう。危えこと。』

『だから目黑もいゝが、火薬運搬は危えこつて言ふのだ。眞正に危えこと。』

『や、來た〳〵。車をつれて來た。』

全く次郎さんが兄さんと姉さんを連れて來たのです。私は車に乘つて家へ歸つた。左の腕が未だ動きません。次郎さんは這麼お手紙をお菊に持たせて寄越した。

『龜子さん、今日の事は默つてゐておくれよ。お父さんは未だ郵便屋の脚を持て餘してゐるんだからね。お前は腕が打れたつてね。僕は氣の毒で〳〵晩の御飯は六杯しか喉へ通らなかつたよ。彼の馬は電信柱に突當つて大きな瘤が出來た

つてさ。馬に瘤が出來たら什麼顏になるだらう？　馬方の方は片日つぶれたばかりださうだから安心おし。兵隊に取られて鐵砲を打つ時に却つて便利だらうと思ふ。最もキセルは粉微塵になつたつて事だ。内證だよ。あばよ、芝よ、お前が怪我してかなしいよ。

追白、お前が寢てゐる間は時々手紙をやるよ。能くお母さんの言ふ事を聞いて早く快くおなり。あばよ。』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

次郎

今日も次郎さんからお手紙が來た。

『おいらの所爲ぢやなあいと、三年烏の所爲だ。山本さん所の山羊は死んぢやつたよ。一體彼の山羊は食心坊だから可けないんだ。お前と二人で此間紙だのハ

ンケチだの喰はせたらう。ところが僕が昨日彼處の庭へ靴を忘れて來て、今日取りに行つたら、靴は山羊が喰べて了つて最早有りませんと女中が言ふぢやないか。すると秀公がね、彼奴は惡い奴だよ、山羊の腹の中を見る法があるつて言ふんだよ。どうするんだいと訊いたら、鼠捕りの團子を喰はせると、彼には燐が入つてゐるから、胃袋の中で燃え上つて、宛然エッキス光線で見るやうに、靴が何の邊に何んな形をしてゐるか分る、殊に靴の事だから腹の中を彼方此方歩いてゐるかも知れないから面白いやと言つた。今考へて見ると秀公は僕を欺す積りだつたんだね。然うとは知らずに、僕は鼠の團子を臺所から盜み出して、パンに仕込んで山羊に喰べさせて、頻りに腹を覗いてゐたら、山羊は坐たまゝ動かなくなつて了つた。もう屹度死んでゐるよ。内證だよ。あばよ。

次郎

追白、お前が早く快くならないと困るよ。富士子さんを連れて來て、此間の繼

つ子ごつこの續きをしやうと思つてゐる。彼の子は彼でナカ〳〵泣かないねえ。』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

病氣で寢てゐるのは退屈なものだ。今日はおばあさんに朝からお話をして戴いた。おばあさんは私が怪我をしたと聞いて、直ぐに歸つていらつしやつたのです。けれども姉さんはなあに彼のやかましやさんが他家へ行つて一日でも居られるものですかと惡まれ口を利いた。

次郎さんから這麼お手紙が來た。

『昨夜お前んちのお父さんはお歸りが晩かつたらう。何故だか知つてゐるかい？僕んちへ碁を打ちに來て、箒木を立てられても動かなかつたんだよ。うちのお父さんが白でお前ん所のお父さんが黑だよ。お前のお父さんは是やセキになるかなあつて、彼の禿頭を斯う三本指で額の所まで擦ぜる癖がある。僕が黑い石の中へ鍋墨を落して置いたものだから、お前のお父さんは歸る頃には頭が黑びかりに光つてゐたよ。今でも光つてゐるか見て御覽。僕のお父さんは僕の袂くそを飲んで、此白梅は馬鹿に辛い、專賣局もナカ〳〵ずるくなつたつて、幾度も噎せて可笑しかつたよ。內證だよ。あばよ。

次郎

追白、南京鼠が六疋子を生んだよ。目が開いたらお菊に一疋持たしてやらうね。』

私は早速起き上つて、お父さんのお頭を探險に行つたけれど、別に異狀もなく、相變らず電氣燈の下で異彩を放つてゐた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『もし〳〵貓よ貓さんよ。』
と次郎さんが窓から顔を出した。
『何人も居ないかい？』
『居ない。お入り。』
次郎さんは窓から入つて來た。御門からなら女關へ通るのだけれど、垣根を乘越して來たのだから、窓から入るのが順序でせう。
『今日は手紙を出さない代りに見舞に來たんだよ。』
と次郎さんは懷中からお父さんの會費を集めに來る人の持つやうな大きなガマグチを出して、
『是に何が入つてゐるか、中て〻御覽。』
『ドロップ？』
『喰べるものぢやない。生きてゐる。』

と次郎さんは大切さうにガマグチを開けて、可愛い南京鼠を六疋出した。未だ目が明かないで、チイ〳〵鳴いてゐる。觸つて見ると溫い。
『僕は勘當されさうだ。お前ん所のお父さんに謝つて貰はうと思つて賴みに來たんだよ。』
『どうして？』
『お父さんは憤つてゐる。大變損をしたつて。此間彼の株は八十圓臺になつたら賣つてもい〻つて言つてゐたんだらう。それで彼の金棒の五百は奈何しませうつて今朝電話が掛つて來た時に、僕は八十圓なら賣つてもい〻と答へた。先方で眞正かと念を押すから、僕はお父さんの口眞似をして、少し聞き込んだ事があるから、八十圓臺で手放してくれと賴んだんだよ。然うしたらお父さんは二千圓損しちまつた。電話つて非道いもんだね。』
それから次郎さんは南京鼠で手品をして見せると言ひ出した。一疋握つて、

『いゝかい、僕が之を失くして了ふよ――天へ上げてしまひます。』
『駄目よ〳〵、耳の間に挿んである。』
『能く分るねえ――今度は手の平へ揉み込んでしまひます。』
『駄目よ〳〵、今そつちの袂へ入れました。』
『能く分るねえ――ぢや今度は南京鼠を喰べてしまひます。』
と次郎さんは南京鼠を眞正に口の中へ入れた。丁度其時に玉が入つて來たから、
『あら、玉が來てよ！』
と私が急に大きな聲を出すと、次郎さんは吃驚して、南京鼠を呑込んで了つて、
『さあ大變だ！』
と眞青になつて、ガマグチも鼠も置きつ放しにして、窓から歸つて了つた。親の傍でなくちや育たなからうと思つて、私は殘つた五疋はお菊に持たしてやつた。
晩になつて這麼お手紙が來た。

『僕はあれから直ぐにお醫者へ行つたよ。代診が容體を書く時に、實は南京鼠を呑んだのですと言つたら、大笑ひだつたぜ。實に珍らしい患者だつて吃驚してゐたよ。それから鼠は大きいかと聞くから、昨日生れたばかりだと答へたら、それなら大丈夫だけれど、これからは那麼ものは餘り呑まない方がいゝつて言つた。粉藥を貰つて歸つて來たよ。あばよ。

次郎

追白、道で生藥屋の番頭に會つたら、もう硫黄は要らないかつて冷かしやがつた。彼奴は薄荷パイプを呉れる約束をして置いて、些つとも呉れないから嘘吐きだ。』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『然うか、彼が君の先生か。田舍芝居の西南戰爭へ出る巡査のやうな髯を生やし

てゐるぜ。然うか、彼が然うか。』
と兄さんが頻りに感心なすつた。
『彼が君、校長でね。大にバンカラを鼓吹したものさ。僕等は殆んど強制的に寒稽古をやらせられたよ。どうも年一年と都下の書生の風が奢侈に流れるつて、校長會議に來る度に憤慨してゐる。お前其頭は何かなんて、今でも僕を子供扱ひにするから恐れ入つちまふ。此間精養軒へ案内したら頗る御機嫌が斜めになつて了つた。バンカラもいゝが、程度問題だね。』
と東益さんは大分叱られたと見える。
『其でゐて能く職員の間の統一がついて行くねえ？』
と兄さんは未だ感心してゐなさる。
『何しろ、君、撃劍が強い上に柔道が三段と來てゐるから仕方がない。』
『亂暴だねえ。丸で戰國時代のやうぢやないか？』

『まあ那麼もんさ。以前は丁髷を結つてゐたさうだが、勅語を捧讀する時に生徒が笑ふといけないとかで、知事の勸めによつて坊主がりに改築して了つた。で、彼の中學校では職員が頭を坊主刈りにするのが昔から不文律になつてゐる。他は以て類推す可しさ。』
『形體的の頭は兎に角、精神的の頭は如何だい？　此痛切な二十世紀に頭の内部まで丁髷や坊主がりぢや仕樣がないぜ。第一生徒が堪らないや。』
『まあ三分刈か五分刈ぐらゐの所だらう。兎に角方二十里に鐵道が一寸一分も無いといふので、日向の國の都の城の向ふを張る不便な土地だからね、時勢には大分後れてゐる。丁度日清戰爭時代の兵隊を西南戰爭時代の士官が引率してゐると見れば間違ない。現に僕は始めて東京に出て來た時、四つ折りの新聞を見て、一大發見をしたやうに喜んだ事がある。國にゐる頃は新聞つて物は必ず帶を締めて五厘切手を貼つてゐるもので、其配達人は必ずや郵便脚夫なりと信じ

切つてゐたんだからね、新聞配達なるものゝ存在には當時の東益沛亭實に一驚を吃して了つた。尤も國でも先頃から新聞が出來たけれど。』

と東益さんは僅にお國の辯護をなすつた。

それからお話は鹿兒島戰爭の校長さんを離れて、所謂時代の潮流なるものに移り、兄さんは僕は現代の謳歌者だと言ひ出した。東益さんも無論大賛成で、結局、男がクラブ洗粉を使ふやうになつたのは、親脛の癖に、父祖の時代よりも生活の地盤が高まつて趣味が精化したのに過ぎぬ、姉さんと御門で握手をするのも、雪子さんとお手紙の交換をするのも、皆時勢の進運の然らしむる所で、其を彼れ此れ言ふのは棺桶の中の老人の悲鳴である、亡國の聲である、時計を反對に廻さうとする努力と一般である。僕等は是から新生面を拓かねばならんぞ、新機軸を出さねばならんぞ、新時代の新文藝は八犬傳や西鶴を知らぬ人の手から出る清新なものでなければならぬ、實に愉快ぢやないか、と蚊えぶしを顚覆してお話が終

つた。

『春子は無論賛成だらうね。』

『私大賛成よ。あつゝ。』

『私も大賛成よ。』

お庭へピカリと稲妻が映した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

お菊は私の蚊帳を吊りに來てスツポンに食ひつかれた。雷神樣が鳴る迄放さないものだから、兄さんが剃刀で首を斬つて了つた。其を私が喰ひついたやうに仰有るから眞正に無理だわ。何時でも然うです。

私は彼のスツポンを次郎さんから預つてゐたのです。明日何て言つて慣るか知れやしない。だから私は、

『是はスッポンよ。』
と食ひつかれないやうに豫め注意してやつたのに、お菊は、
『まあ怖い事、食ひついて？』
なんて人の言ふ事を馬鹿にして、おもちやだと思つて手を出すのですもの。
『危いよ！』
と私が吃驚して止める間に最早人さし指を咬まれて了つて、眞正に馬鹿だよ。命知らずだよ。私死んだつて知らないからいゝや。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今日は大變な事をして了つた。次郎さんは最早勘當に定つてゐるから構はないけれど、私は眞正に困つて了ふ。
次郎さんは南京鼠の所爲だか如何だか知らないが、少し加減が悪くて外へ出ら

れないから、富士子さんを誘つて遊びにお出でと、お菊に言傳をして寄越した。で、私は早速富士子さんと御一緒に御見舞ながら行つて見たら、次郎さんはお父さんの燕尾服を引ずつてニコ〳〵しながら、
『どうぞ此方へ。眞正は病氣でも何でもないけれど、お父さんは昨夜から旅行をした。お母さんは病院へ行つて夕方まで歸らない。僕が奉公人と一緒にお留守番だ。實に千載の一遇ともいふ可き好機會だから、何か面白い事をして遊ばうぢやないか。南京鼠さへ殺さなければ何を毀してもいゝ。』
と仰有つた。そこでお座敷へ入り込んで、種々とお話をしてゐる中に、次郎さんは活人畫をやらうと言ひ出した。
『金色夜叉にしやうか不如歸にしやうか乳妹姉にしやうか、僕は精く知らないけれど矢つ張り紅葉が好きだから金色夜叉にしやう。僕が貫一になるから、お前はお宮にお成り。』

『私お宮はいやよ。浪子ならなるけれど。』
と言ふと、富士子さんが、
『私お宮になつちや可けなくて？』
とお宮になりたさうにしてゐなさるから、次郎さんの貫一、富士子さんのお宮といふ役割に定つた。
次郎さんは私を踏臺にして床の間の掛け物を外して、壁へ白墨で浪だの松の木だのを澤山描いて、
『是は熱海の海岸だよ。然う〳〵十七日のお月樣がなくちやあ。』
と上の方へ大きなお月樣を書き加へた。それから御自分の學校帽子に白筋を入れて、お父さんのチョッキを着て、ズボンは運動ズボンで間に合はせて、燕尾服を外套代りに肩から引掛けて、ステッキを持つて、靴を穿いて床の間へ上つた。富士子さんのお宮は丁度西洋間の方へペンキ屋が塗替へに來てゐたから、白ペンキ

を少々戴いて、お化粧をして、私の被布を着て、是も雪駄の儘で床の間へ上つた。見物人は私一人、晝間の事だから、マグネシウムを燃す必要もない。全く寫眞機があつたら取つて置きたいくらゐの上出來だつたものだから、次郎さんは此儘舍すのは惜しいから、引續いてお芝居にしやうと發起して、
『宮さん、お前は奈何してもお嫁に行く氣かい？』
とイヨ〳〵金色夜叉になつた。宮さんは何とも言はないで泣きさうな顏をしてゐる。それから、
『月が曇つたら、宮さん、月が曇つたら、宮さん……貫一は、』
になつて、未だ宮さんを蹴飛ばしもしない中に、宮さんは涙をボロ〳〵零してゐなさる。全く富士子さんは天才だよと感心して見てゐると、實は顏がビリ〳〵して仕樣がないつて泣き出して了つた。次郎さんも私も吃驚して、直ぐお手洗鉢へ連れて行つて、石鹼で洗つて上げたけれども、ペンキはどうしても落ちません。

富士子さんは泣きながら、私の被布を被つて歸つて了つた。

晩になつてから、富士子さんのお母さんが私の家へも次郎さんの家へも慣つてお出になつた。先刻次郎さんのお母さんは未だお身體が本當でないのに、お母さんの所へ御相談に來て、二人で富士子さん所へお見舞ながら謝罪に行きなすつた。自分でお宮になりたがつて置いて、眞正に聞分がないから困つて了ふ。

此處まで書いたら、お菊が這麼な手紙を持つて來た。

『僕は富士子さんのお蔭でお母さんにお仕置をされたよ。今度こんな事をすれば堪當するつて言ふから、今日では法律上勘當なんて事は出來るものでないつて教へて上げたら、お母さんは僕の口を抓つて、今度こんな事をしたら感化院へ入れて了うつて、叱り直したよ。けれども明日の後に又明日があるやうに、今度の後には屹度又今度があるから、安心なもんだ。僕は獨り息子だからね。感化院へ行つたつて、赤十字社の前だから近いや。直ぐに逃げて來る。あばよ。

追白、僕は最早富士子さんとは絶交するよ、』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

次郎

『お嬢さま、旦那樣と奥樣が一寸。』

とお菊が姉さんを呼びに來た。叱られるのなら面白いと思つて、私は跟いて往つて見ると、姉さんはお父さんとお母さんの坐つてゐた火鉢の横に、お醫者さまに見て戴く時のやうに秩然と坐つてゐなすつた。

『龜子、お前は彼方へ行つておゐで。』

と木の端か何ぞのやうにお母さんが仰有るから私は直ぐに出て來たけれど、お菊は悉皆立聞きをして了つた——密談なんてものはお芝居に限らず大抵立聞きされて了ふ。

『何うしたの？　叱られたの？』
『然うぢやなくてよ、いゝ事よ。』
『いゝ事つて？』
『、この字に、えの字よ。』
『、この字に、えの字つて？』
ところへ姉さんが上つて來たものだから、お菊は、えの字の後を敎へないで慌てゝ逃げて行つて了つた。麁相かしい子だよ。
『到頭お父さんに訊かれてよ。』
『何てお答へなすつたの？』
『私、無論卒直に言つちまつたわ。』
『どうですか！』
『あら、眞正よ。だから最早大丈夫よ。唯訊いておけばいゝのだと仰有つたか

ら。』
『兄さんから仰有つたのでせう。』
『然うかも知れませんよ——矢つ張り此間の小說の文句は巧くてね。』
『どの？』
『匿し切れないもの二つ、曰く咳、曰く……戀つて。』
と獨逸言の會話も昨今はナカ〳〵大膽になつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

久しぶりで雪子さんがお遊びにお出になつた。けれどもお生憎ねえ。兄さんは、お留守よ。お父さんは結婚式や園遠會へは必ず御自分で御出馬になりますが、葬式といふと版行で捺したやうに兄さんに代理を仰せつけなさる。お葬式がお嫌ひなのでせうか？兎に角兄さんは親爺は不都合だよと有仰つて、先刻出て行きなす

つた。

例によつてお辭儀動物はお辭儀の仕合をして、一と通りの御挨拶が濟んでから、

『何故お來にならなかつたの？』

と姉さんが訊くと、雪子さんは、

『だつて……』

と赤いお顏をなすつて、

『お母さんは？』

と訊いた。

『今直ぐ。』

と姉さんは答へた。それから少時お話があつて、雪子さんは、

『兄さんは？』

と聞えるか聞えないぐらるのお聲を出した。

『お父さんの代理で、お葬式にいらつしやいましたが、四時頃には戻つて參ります。』

そこへお母さんがお出になつた。矢つ張り姉さんのやうに、何故這麼に長くお來にならなかつたの？　隨分お見限りねと仰有ると、雪子さんは先刻のだつてをでもなんだか……に改めたばかりで、又赤くなつて、

『實はお父さんがお母さんが近い中に上る筈ですけれど……宜敷申上げてと申しました。』

と言つて又お辭儀をなすつた。

私も……でもなんだか御樣子がをかしいと思つて不審を打つてゐたら、どうも驚くぢやありませんか、兄さんとの御緣談が大略定つたのださうです。私は然うとは知らないものだから、おばあさんの御贔負の鄕里のお鈴さんを貰つて上げるやうに、機を見て兄さんにお勸めしようかと思つてゐたのです。然うなら然うと